鳥居観音
と
平沼彌太郎

島田知明編著

プレス刊

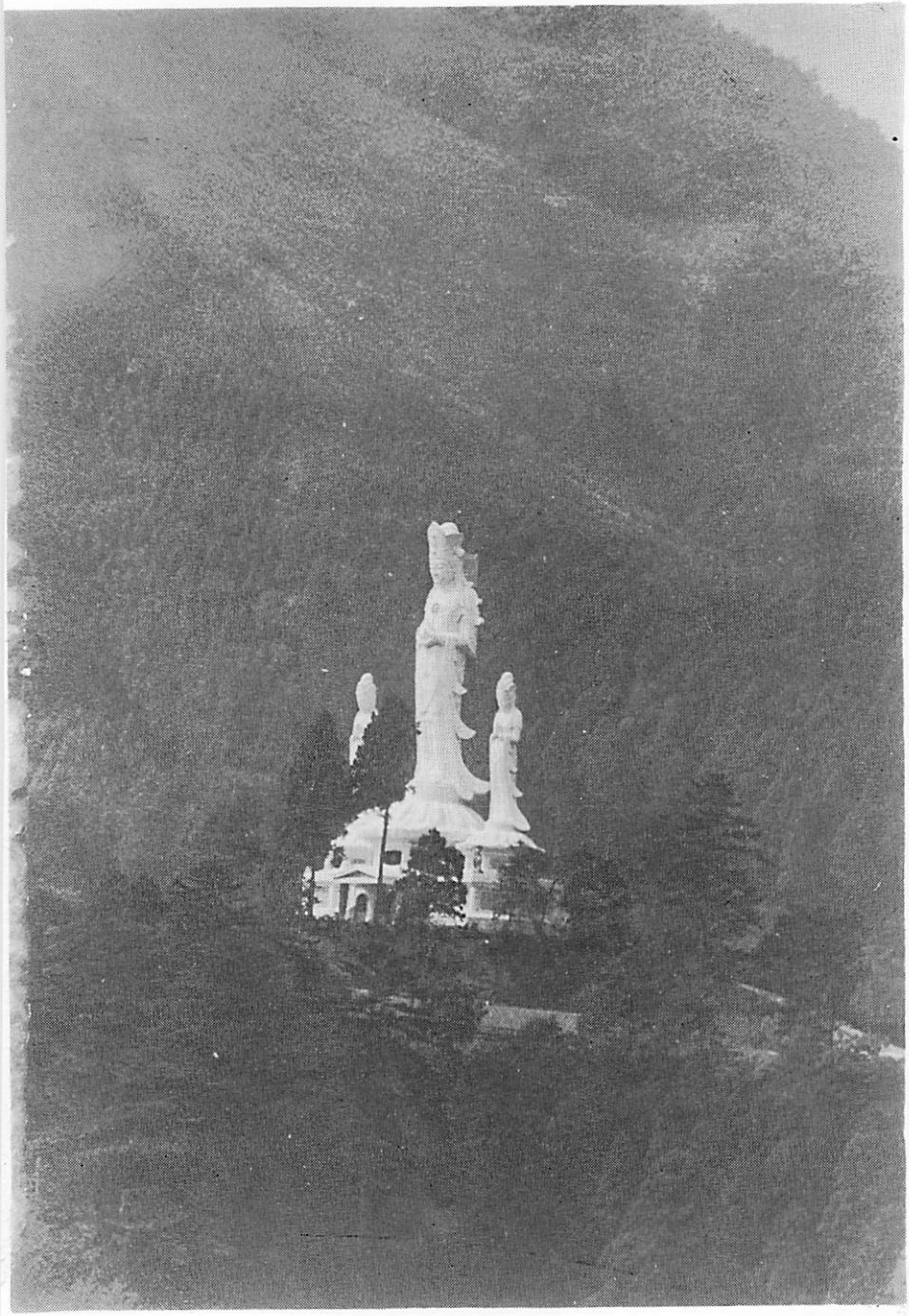
☆ 表紙マークは鳥居観音のシンボルマーク

☆ 扉の観音像は平沼彌太郎画

☆ 口絵写真P 2～3は鳥居観音境内の白雲山全景

☆ 口絵写真P 4は白雲山中腹にそびえる完成した救世大観音。最高34メートル

平沼彌太郎氏の近影（とみ夫人と共に＝大観音建立現場で）



発刊に寄せて

友松　円諦

私が平沼先からお招きをうけて埼玉銀行の新入行員の精神講話に浦和の本社に伺ったのは終戦後、間もないことのように記憶している。そのとき頭取室に請じ入れられて先づ目についたものはたしか一隅の大黒様の彫刻であった。初めは軽く、「さすが銀行屋だな」位にうけとっていたけれども、あとで頭取自身の御作と聞き近かづいて拝見し、その非凡な出来に驚いたことを今に覚えている。平沼先生がただの銀行家、ただの金持でないことをこの時から感じとっていた。それから二十何年の親交がつづいたのである。水野梅暁師を通じて玄奘三蔵法師塔を建立せられたときにも、先生がこの事業に傾倒された打ち込み方というものは水野師への友情、日中仏教の交流という国際感覚もさることながら、先生の護法心の一端を拝見することができたと思う。

その後、私は毎年浦和に招かれたばかりでなく夏季講習には銀行の逗子寮に出講して何

十何百の埼玉銀行々員の仏教講習をさせて頂いた。しかし、これは決して平沼先生の仏教に偏した教育ではない。行員一般に対する精神教育が主目的であった。しかも、その原点に先生の御母堂の御遺志に出発した奥の院観音堂造営にあったようである。四十八才で若死にされた仏心に厚い母君の御信仰にむくいようとする先生の孝心に発するものと伺っている。その後、私が親しく練馬の先生のお宅をお訪ねしたときアトリエの天井一杯に仁王立ちしている仁王尊の彫刻にとりかかっていられた先生の雄姿を拝見したとき、まさに孝心にのみふるう老芸術家のおすがたを見出したのである。たとえ一、二の協力者があったにせよ、これだけの大作を完成することは容易のことではない。わけて公私多忙の先生の生活の中からこれだけの巨作をつくり出すことは奇蹟にもちかいことである。ただ財物で、ただ閑暇でできたわざではない。ただ一つ、〃道心〃のしからしめたものと思う。

ちかく落慶せんとする。白雲山頭救世観世音像が空高くそびえ立ち、春はさくら、秋はもみぢ、白雲の去来、未来永劫、都人賽客法を求めて群参せんとす。先生の一族こぞって鳥居観音に杉林を施捨——当来、観音の大悲庶民のオアシスとして無畏施となすべし、いささか以て序となす。

昭和四十六年十月

（神田寺前管）

目　次

発刊に寄せて　友松円諦
第一章　生いたちと開山への道のり……13
ゆかりの名栗
祖先の系譜
お天狗さま
発願主、母の遺言
第二章　観音堂と彫刻家・桐江……41
自ら困難を求めて
桐江、釣りに遊ばず
仏教彫刻に魅せられて
第三章　白雲山初期のエピソード……51
地蔵堂縁起
仁王門縁起
松井大将書の碑
第四章　玄奘三蔵塔のゆかり……69
数奇な歴史のめぐり合わせ
分骨と水野梅暁の役割

塔建立への一大悲願
玄奘三蔵法師のこと
第五章　本堂と七観音……91
明確になる独創性
仏像彫刻つぎつぎに完成
七観音の独創
七観音、26年目に揃う
本堂増築される
玉華門と高階瓏仙
大黒天縁起と銀行
第六章　救世大観音建立と永遠の追求……147
宗教美術の超時代性求めて
芸術観と宗教観の結集
話題まいた創作工程
入魂の数々の胎内構想
若い世代へのアプローチ
玄奘三蔵法師霊骨塔発起人名簿……167
宗教法人・鳥居観音規則……183
あとがき

鳥居観音と平沼彌太郎

第一章　生いたちと開山への道のり

ゆかりの名栗

国鉄八高線（八王子―高崎）は、埼玉県の東平野部と西の山間部との境目を分断するように走っている。西部でも比較的低い、海抜一〇〇～六〇〇メートル地帯のその最も南部に名栗村がある。

東京からは、西武池袋線に乗り一時間で飯能市に出、ここからバスで名栗川沿いに西へ三〇分である。

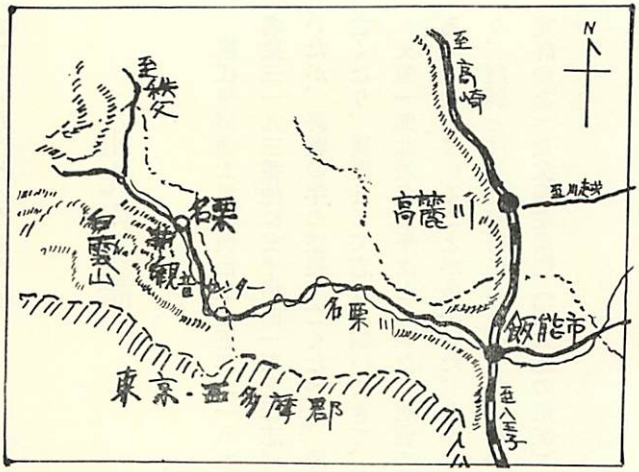
ここ埼玉県入間郡名栗村の上名栗三一九三番地周辺をまた鳥居という。鳥居は武甲山の前にある一〇〇〇メートルクラスの武川岳、大持山、滝ノ入山などを源とする川と、有馬谷を流れる有間川とが合流する地点・河又の一キロほど北にあたる。この二つの川が合流したところから名栗川というが、昔の名栗川は入間川を経て隈田川にそそぎ、関東の吉野

といわれた日本有数の林業地（西川林業地という）名栗地方と江戸を結ぶ重要な水路になっていたのだ。

名栗川の上流にある鳥居は、川を隔てて向い側に五〇〇メートルほどの山並みがつづき、また鳥居の背後には五六〇メートルの金毘羅山があり、その前を屏風のようにいくつかの峰が並んでいる。――夏、この峰の向う、つまり金毘羅山や有馬谷の空をのぞむと、雷雲がむらむらと湧き上がり、鳥居の峰々をおおうようにみえる。その姿から、この峰々を白雲山という。

白雲山・鳥居観音はこのような地勢の中にある。その広さは約一〇万坪（三〇万平方メートル）、開祖は桐江平沼彌太郎である。

平沼彌太郎はこの地に生れ育ち、大正の初めから昭和の今日まで政財界で波乱の多い生活を続けてきたが、先祖代々の家業である林業をあくまで自己の本業として貫いてきた。山の木々の間で育った彼は今、先祖の墓の近くなるこの地に、観音信仰者であった母の志をついで自ら彫った数知れぬ観音像を安置し、また自ら鎌、ナタをもって整えた一〇万坪のこの山に安息の日を見出したのである。観音像の全て、その安置せらる広い境内、いずれも平沼彌太郎入魂の創造物である。



観音さまは日本人にはポピュラーな仏さまである。それは裟婆有縁の仏さま、つまり天界と俗世界とを結ぶ庶民に親しみやすい仏さまだからであろう。そしてまた、妙を知ったものであれば誰でも観音さまになれるという法華経の教えが人を惹きつける。平沼彌太郎がこの観音信仰に打ち込むようになったのもきわめて自然である。母が観音信仰者であったことと、多難な公事をなし終えた後の〝永遠の命〟の希求があったからだ。

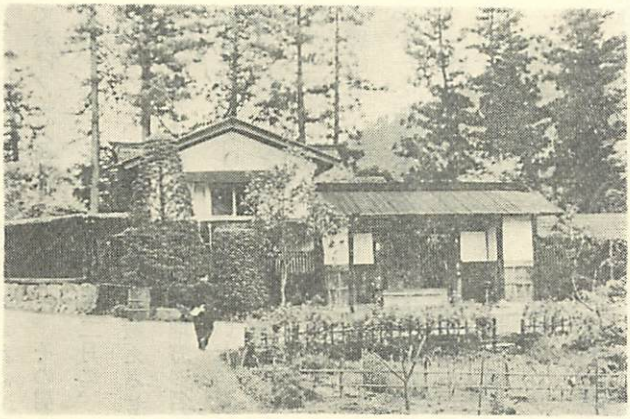
しかし、それまで到達するには余りにも多くの衆生界の波をくぐってきた。それゆえに彼自ら開いた白雲山・鳥居観音は他の観音とちがって、独自の世界をつくり上げている。その鳥居観音を知るには平沼彌太郎その人を

まず知らなければならない。

祖先の系譜

桐江平沼彌太郎は明治二十五年（一八九二年）六月十二日、埼玉県入間郡名栗村大字上名栗三一九三番地に父平沼源一郎と母志げの長男として生れた。彌太郎の上に長女時子がいたが、終戦の年の空襲で亡くなった。時子は源一郎の初めの妻ゆきの子だが二十四才で亡くなり、後妻として志げが嫁いできて、彌太郎は一番目に生れた子である。

父源一郎は幼名嘉平次といった。病弱で若い時分から名栗村を離れ、東京の親戚のところで養生していることが多かった。しかし、大磯にある別荘へ男衆、女衆をつれて遊んだり、病弱とはいえ結構楽しみを欠かさなかった。こうした源一郎の立場は働きものとして定評のあった父源左衛門（彌太郎の祖父）の目に十分心強く映らなかったようだ。



平沼彌太郎の生家（白雲山麓にある）

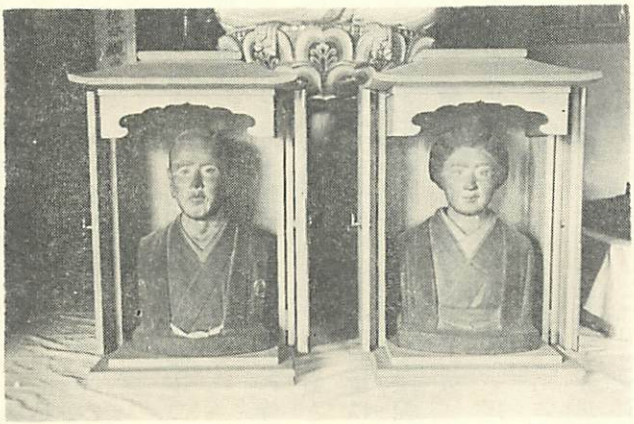
この家督相続にあたって源一郎は相当苦労したが、よく耐え切り源左衛門の後継ぎとして独立し、病弱な身ながら林業経営には才を発揮した。彼は非常に社交的な性格が豊かで、別荘に村の要人を招待してもてなすのが好きだった。もっともその席には源一郎は出席しなかったが、もっぱら新左衛門が接待の任にあたった。県知事なども訪れると必ずとまっていった。また名栗の村でも平沼家には始終客がたえなかったので少年の彌太郎にはその目まぐるしさが記憶された。

そんな源一郎も一刻なところがあった。ある日、彼は家に働きに来ていた男衆に柿の実をとらせた。いわれるままに男は実をもいだが、つい青いのまでとり過ぎてしまった。そ

れをみて源一郎は、「そんな食われぬものまでどうするつもりだ」といい「そのままならせておけ！」と怒鳴ったものだ。その男はまた慌てて、木に登りヒモで実をつるした。

彌太郎は十九才の大正元年十二月に、一年志願兵に甲種合格し歩兵第六十六連隊に入隊した。その年、父源一郎は体を鍛えさせるため彼を旅に出した。彌太郎は少年兵のいでたちで信玄袋を背負い東海、近畿地方の名勝を回って歩いた。彼は行く先々でキチンと父母に手紙と同時に土産物を送っていた。意気揚々と出かけた旅もひと月も歩いているうちにようやく飽きてきた。その頃、母志げは大磯に来ていたので彼は行きちがいになるのではないかと思い、それまで一日も欠かさなかった手紙を三日ほど出さなかった。数日後、彼が大磯に着くと母はよほど心配していたものとみえて、「よかった、よかった、無事でよかった」と何度も繰り返して言った。初め彼はそんなに喜ぶ母に驚いたのだが、ひと月の間、一日も欠かさず届いていた手紙が三日も途絶えたときの母の心配を思い、わるいことをしたと感じるとともに、母の深い愛情が身にしみて嬉しかった。

一方、父は彼が帰宅するや否や「このバカヤロー」と怒鳴った。彌太郎は当時、甘納豆がどんなものか知らなかった。それで浜松にいたころ、名物の浜納豆（しょう油の素）を甘納豆といって送ったり、赤ハラ（大きな子持ちウグイ）を送ったことがある。父はこれ



平沼彌太郎自身が彫刻した父源一郎と母志げの像

を取り上げ、「あんなしょっぱい甘納豆などあるものか」「ウジがわいた赤ハラなぞ食べられるか」などと小言をいった。しかし、それでも父や母が内心それを非常に喜んでいるように見受けられ、彌太郎は怒られたようには感じなかった。

源一郎は病弱の身を知っていたので、彌太郎には早くから仕事をおぼえさせたがっていた。彌太郎は三十五才になった昭和二年、鬼とみと結婚した。彼はその前後から父の代わりに一切を引き受け、村では旧家が代々結婚の世話をすることになっていたので、彼はおびただしい数の仲人役を行ない、そのころのを加えると現在に至るまで一〇〇組近い縁組みを取りまとめている。その彼も四十才のと

き体を悪くして単身温泉に出かけたことがある。体調が回復してつい金を使い過ぎてしまったので父に送金方を気がねして申し込んだ。源一郎はそれに小言をいうでもなく、金を送ってきた。彼は父の心意気に恐れ入って、かえってもう温泉に長居することができなかった。

源一郎は四十九才になった明治四十二年七月、平沼家の家憲を整えるとともに先祖の系譜を整理して次のように記している。

「我家の遠祖は豊臣右大臣秀頼公の侍医にして元和元年大阪夏之陣之役に退去して九州に下り彼の天草の戦役には一方の首領となりたる森宗意軒の子にして大炊と云う。

医業を修め天草役前にひそかに関東に来り。徳川氏を憚り此の秩父郡の山地に住居せらる。是我平沼家の高祖なり。然れども記録なし。口碑を以て其子孫に伝うるのみ。唯医薬の秘書一巻及び薬籠の遺留品あるのみ。今茲に実跡明瞭致せる宗祖且又我家をして今日の光栄を得せしめし中興の祖先を敬んで拝書す」

こう記してあと宗祖の名を次のように列記している。

「一世　平沼大炊之助（法名、光寒忠劔居士）

（この記録を整理した）明治四十二年まで二二一年目に当る元禄二年四月二十五日

歿す。享年不祥

二世　平沼藤左衛門（法名、浮散浄雲居士）

（同）明治四十二年まで二〇五年目に当る宝永二年二月二十九日歿す。享年不祥

三世　伜　藤左衛門（法名、霜節大重居士）

（同）明治四十二年まで一五七年目に当る宝暦三年十一月一日歿す。享年不祥

四世　平沼源之丞（法名、華応露心居士）

（同）明治四十二年まで一三一年目に当る安永八年十一月四日歿す。享年不祥

以上は履歴祥記する事不能」

として、五世平沼藤八から少し詳しくその人となりを記録している。

それによると、五世平沼藤八は八代将軍徳川吉宗の代の享保年間に生れたものと推定される。藤八は平沼家の林業経営の基礎をつくった人として最も古く記録されている人で、明治の末、年輪の高さでは当時屈指といわれた字諏訪の入の一部にあった杉や檜はこの藤八が植培したものといわれる。その木の高さは約三〇メートル近いものであった。いま鳥居観音境内にある木がそれで、周囲三メートル級のものは現在二五〇～三〇〇年の樹令のものである。

藤八は文化四年十二月十二日亡くなり法名は寿岳源量居士と定められた。明治四十二年から数えて一〇三年前にあたり、そのころとしては長命の八十才余の生涯であった。

六世平沼松次郎は藤八の長子である。松次郎は父の仕事を引き継いで殖林に励み、やはり八一才という長寿を全うし弘化三年十月二十六日、この記録の六四年前に亡くなっている。法名、満徳栄寿居士。その子、平沼栄左衛門は松次郎の長男で七世になる。やはり祖父からの林業を能くし、慈善徳行の人として知られ、源一郎が生れる前年の安政六年十一月十七日に亡くなった。法名、徳法観山自照居士。栄左衛門には嫡子がなく実弟の平沼助次郎が八世を継いでいる。前記のように、のち源一郎と名を改め、隠居してからさらに源左衛門と称した。

源左衛門は智勇ともに秀れ、まじめで商才もあったので、先祖代々の殖林業が将来も有望であると看取り熱心に経営に励んだ。孫やさらに曽孫彌太郎の代まで引き継がれる林業財産はこの源左衛門が確固としたものにつくり上げていたのである。源一郎が二十六才の年、明治十九年二月二十二日七十三才で亡くなっている。法名、大徳鶴翁賢道居士。その子、兵三郎が九世である。成人して源一郎と改め、家督を長子の源一郎に譲ってからはやはり父と同じ源左衛門と称して隠居している。この人も先祖の家業を能く承継して十世嘉

平次が四十二才の明治三十五年十月十日、六十四才で亡くなった。法名は顕光聞岳源理居士。嘉平次は父の亡くなった翌日、源一郎と名を改め十世となる。彼は父の七回忌の明治四十一年十月十日、檀寺に法衣一具を寄進して追善とした。そして累代の墓地を名栗村大字上名栗字鳥居三一九〇番地に定めたのである。

源一郎は大正年代に藍綬褒賞を得ている。彼は病身がちで自ら大きな仕事に手をつけなかったが、大口の寄附など有形無形の奉仕をしてきたことが認められたもので、彼のような受賞はめずらしいケースであった。源一郎の代までの家の発展はその家の構造をみると一目でわかった。というのは先祖からの母屋を中心に代々、家をつぎ足し、つぎ足ししてきた独特の家構えであった。また、先祖の法名にも、しだいに長くなるとともに地位の重い名が授けられてきているのでもわかる。鳥居観音の発願主で、開祖平沼彌太郎の母志げは信行院徳室妙鑑大姉といい、信行院の称は平沼家の最高の法名となった。この法名が語るように志げの厚い（観音）信仰と源一郎の商才が今日、平沼彌太郎の大きな支えとなったものである。

源一郎は昭和四年二月十日、名栗の自宅で七十才の生涯を閉じた。法名は住誉院天真源雄居士とされた。

お天狗さま

徳川時代中頃から目覚しく発展した西川林業地は飯能市から北西に扇形に広がる十ヵ村の地域である。西川とは、江戸の西の川という意で名付けられたもので、名栗川、入間川などの総称である。これらの川を利用して伐採した木材をイカダに組み江戸へ運んだのである。この地は雨量、地質が殖林に適し、したがって材質、林相ともに秀れているので、関東の吉野といわれるほどに林業が栄えた。こうした地に父祖伝承の林業を平沼彌太郎が継いだのは中学校を卒業してすぐ、二十才になった明治四十五年四月である。

彼は名栗小学校を出ると東京・小石川に住んでいた伯母武田英一・錦子の家庭から京華中学校に通っていた。武田錦子は彼の母の姉にあたり、お茶の水女子校の教師で、鳩山薫子よりも早く、女性として日本で最初にアメリカ留学した人である。

彌太郎は中学からさらに大学へ進学したいと思っていたが、父源一郎は自分が病弱であったために早く彌太郎に家業をおぼえさせたいと考え進学させなかった。一時それで彌太

名栗の渓流　四季の色どりが美しい。釣りやキャンプに好適だが，昔イカダを組んでこの川を下り隅田川に出たことを知る人は少ない

郎は反抗して武田家を飛び出したりしたが、結局父に従わざるを得なくなった。しかし、家業を手伝い始めると彌太郎はそれに打ち込んだ。まず父の仕事の拡張をはかり、秋田、新潟、伊豆などへ山を買いに飛び回ったり、逓信省の電柱の入札などにも参加した。

林業は非常に長期間のサイクルで営まれるもので、伐採収入が三〇年、四〇年に一回というものだけに、経営は地味で根気が要り、計画的でなければならない。だから一町歩の収入を一万円にも二万円にもするためにも手入れと念入

りな観察が必要である。そこで彌太郎は木の年代を統一し、いわば一斉林にする工夫や自分の山の実測図の作成に取りかかった。木の年代、本数など樹木台帳をつくって総石数を算出したり、伐採期を四〇年輪伐にするためにはどうしたらよいか。経済の好不況期と伐採本数のコントロール、その収入予測――など綿密な調書をつくり終えるまでに一〇年を要したのである。そして面積はそれほど広くないにしても価値ある山にひと通り仕上げるにはさらに一〇年の努力が必要だった。

彼が測量に熱中している頃、村の人々はいつか彼を〝天狗さま〟と綽名するようになった。急斜面の谷や峰々をわたる彼の足は、いまそこにいたと思うとアッという間に向うの峰に姿を現わすというほど早いものだったからだ。連れの人が驚いて話したエピソードからそう名付けられたものらしい。また彼は少年時代を木々の間で過したのでその頃でも木登りが得意で、命綱なしでスルスルと高い木に登って枝打ちしたものである。また彼が東京で公務にあった頃、建設中の高いビルに上がった。鉄骨だけの高い窓べりのような所を苦もなくつたって歩いたので、はたの人がア然としていたという。

このように根っから木を愛し木とともに育った彼は、三十才になる頃から後に詳述するように県の林業関係諸団体の指導的地位に推され、その後その地位は全国組織にまたがる

若い頃，天狗さまと綽名されるほど山と木に親しんだ。これは三蔵塔建立地の下調べのため木に登って四囲を検分しているところ。

ものになって行く。平沼家一家の林業経営の才能が全国の林業経営者への知恵として引き出されて行くのである。しかし彼の故郷西川林業地に注ぐ愛情は変わらず、その愛情がこの地を歴史の上に永久に残したいという志向に高まっていった。この地を観音の地領にすることによってそれが成され得ると考えるようになり、鳥居観音がここに置かれることになるのである。

鳥居観音の境内として整えるための努力がまた驚くべきものがあった。測量によって所有林の概要

白雲山の手入れには30年を要した。鳥獣草木の姿にその成果が現われている。彌太郎はとても銀行頭取とは思われない姿で週末ごとにカマやナタを手に山に入った。

を掴んだ彼は昭和十五年、鳥居観音本堂に聖観音を安置する前後から、山の手入れを始めた。これは埼玉銀行頭取に就任した昭和二十四年頃を経て、ほんの最近までの三〇年間にわたる根気の積み重ねとなった。公職にあるときは毎週土曜日の夕方東京を発ち、日曜日いっぱいを山の中ですごした。そのときの身ごしらえはジャンパーに地下足袋、頬冠り、腰にナタ、手に鎌をもって数人の手伝いを供にした。その彼の姿からは埼玉銀行の頭取と推察することはまず不可能だった。

ある日、めずらしく商用の客が鳥居へ尋ねて来た。彼が境内にいると聞いて山を登って来た客人は、途中で出会った彌太郎に向い、「頭取はどこにおられるでしょうか」と聞い

た。彼は一瞬面食らったが、茶目っ気が出て「広い山の中ですからどこにいるかわかりません」と答えた。するとその客は「そうですか」といってさらに山の奥の方へ入っていった。あとで庫裡で面会して互いにあやまりながら大笑いした。

最初の鎌入れは難渋を極めた。急な谷、足場の悪い斜面で蔦、葛のたぐいの各種の雑草を刈り取り、美しい花を咲かせる野生草木の生命を保護することをまず作業の第一目標にした。この手入れは繰り返し行なわれ年月を経るごとに花の色どりがくっきり表われ、種類も定まっていった。彼はそのとき草花、つまり自然というものが実に正直で可愛いものであることを改めて実感したのだった。丹精し手入れしてやるときっときれいな花を咲かせる。花の命が心に伝わってくるように彼は感じた。こうしてその長い地味な努力の結果、今では四季それぞれに花々が美しさを競い、白雲山は一年を通して花がついていない時季がなくなったのである。

すなわち、三月下旬から四月上旬にかけて梅、椿、つつじ、岩鏡が花をつける。四月後半には山桜、紫つつじ、山吹が色彩を増し、五月中頃までは赤つつじ、六月上旬にはどうだん、七月は山百合、合歓木、朴の木の季節、十一月中頃には全山が紅葉する。

このように色とりどりの花々が白雲郷を埋め尽くし、全山の三分の二を占める薊蒼とし

て力強い杉、檜の引き立て役を果しているのである。この杉、檜は以前、彼が実測しているものである。十分に年代を経、林立する木々の高い梢から洩れる陽光を浴びるとき、鳥居観音の安置どころは幽々たる神域の世界をさらに奥深いものにする。公職のあい間の寸暇をさき、三〇年という長い年月にわたって手入れしてきたその意気込みが、いま開花しているわけである。彼がこの地を寺領とし保安林としたのは皆伐させず永久保存するためである。そして何十年か何百年かのちに、人がここへ来てみたとき、「これはまたすごい年輪を刻んだ、めずらしい杉だ」と観賞してくれればよいと、それだけを彼は願う。

このように平沼彌太郎の稀有の自然愛は木々、草木に命となって宿っている。

遠く未来のいつか誰かがこの白雲山が平沼彌太郎という一人物の手によって自然の美しさを蘇らせたということを思い出すだろう。そのとき平沼彌太郎の命が永遠になるときであるといえよう。

発願主、母の遺言

平沼彌太郎が今日の鳥居観音を開くに至るにはこんなエピソードがある。

母志げは後妻として平沼家に嫁いできた。先妻の一子、時子のほかに彌太郎など五人の自分の子、そのほか平沼家の複雑な事情で多くの子供たちの面倒をみなければならなかった。しかし、志げは、どの子に対しても我が子と全く変わらない愛情と注意をそそぎ育てあげていった。また、夫源一郎は難しい林業経営の家庭で、とかく磊落だったことから家計のやりくりに苦心したが、質素倹約をつらぬき、先祖から受け継いだ財産を大きくふやしこそしなかったが、減らすことはなかった。母として女として、確実に生きた女性であった。

そして、その彼女の生きる力の支えとなっていた精神的な柱が観音信仰だった。彼女の信仰歴は亡くなるまでの三〇年以上になったが、毎月十七日には隣近所の人々を集めて観音経を唱え、茶菓を供して一夜を歓談した。このときのお賽銭箱に五厘銭や穴あき銭があ

観音堂　母に観音堂建立を託されながら彌太郎は十数年を経，召集がかかって初めて母の遺言を実現しようと決心した。死というものを実感したためか……。この堂はそして昭和15年に完成し，のちの鳥居観音の母胎となった（P41参照）

り、それによって観音のお堂を建てようと考えていた。お堂を建てるのにどこが一番よい場所かと、彼女は彌太郎をつれていまの白雲山の中を歩いた。だが、彼女はその志を遂げることができず大正五年十月、四十八才で亡くなった。のちに賽銭箱をあけてみると一厘銭、五厘銭で七十余円という額になっていた。「私にかわってお前がこのお金を元に観音様のお堂を建てておくれ」と言い残したのだった。

彌太郎は母から志を継ぐことを依頼されながらもそれほど火急のことと意識しないまま家業と公務に専心し、母の死から十五、六年も経っていった。昭和十三年頃、支那事変が大東亜戦争へと拡大しつつある時、平沼彌太郎は歩兵中尉として召集されるかもしれないと思った。その時、彼は初めて死というものを意識した。そして彼の心に蘇ったものは、母が言い残していった言葉――お前の手で観音さまのお堂を建てておくれ、というあの声であった。彼はもし戦場に出て死に、あの世に行ったとき、そこで母に会ってお堂がまだできていないことを告げたら、母はどんなに失望することだろうと考えた。こう考えたとき彼はもうじっとしていられなくなった。そして彼は直ちに現在の大黒殿のところに三坪ほどの小さな祠を建て、その中に自ら彫刻した聖観音と梵天、帝釈天を安置した。ときに十五年四月のことである。――これが鳥居観音が開かれる発端である。そして、この観音

観音堂内　聖観音を中央に左が梵天，右が帝釈天（第二章参照）

堂を本当のものにするには自ら観音の世界に生きる心掛けと知識を広めなければならないとの示唆を受けて、戦時下にありながら西国三十三ヵ所巡りに旅立った。これが彼のその後の彫刻に大きな影響をもたらしたのである。

こうした彼の人生の一時期を画すような事柄も、当時はまだ彼自身にはっきりとした認識にまで昇華されていなかった。それは彼の家業と公務が甚だめまぐるしく、多忙を極めていたからだ。

多忙きわめた公務の中で

彼の林業経営の手腕は定評があったが、それは公的団体の認めるところとなり、いやがうえにもそうした組織の重要なポストに引き出された。まず埼玉県山林会では彼が二十代になった大正初めから同会が解散する約二十年間を副会長として務めた。梨本宮様を総裁とする大日本山林会や、帝国森林会では長い間にわたり評議員や理事として加わっており、府県大会などによく出向いた。

昭和五年、木材の濫伐によって山林の荒廃が問題になっていた折から、アメリカや樺太から膨大な木材が輸移入され、木材価格は半額以下に暴落した。このため内地林業家の受けた損害は甚しくその救済が急務となっていた。そこで木材関税改正期成同盟が結集されたが、平沼彌太郎もその一員として参加し、壮士風のいで立ちで議会などに陳情運動を盛り上げた。彼らの運動が効果となって二年目に木材関税が引き上げられ、日本の森林擁護のタテとなった。この同盟が母体となり昭和七年、社団法人全国山林連合会が結成され、彼は常任理事となった。この団体で彼は政治問題のほかに特殊林産物の増産、集荷など銃後の仕事に励んだ。のちこの団体は全国森林組合連合会が昭和十年に結成されるにあたって発展的に解散している。

一方、県の山林会副会長に就任してのち六年目の昭和六年三月、自分の生れた名栗の村長になり村会で活躍した。当時、同村は上名栗区と下名栗区に分かれており、千数百町歩(約四百万坪)の村有林があって、その林業経済は豊かであった。しかし、それゆえ両区の区会議員は村会議員より実権があったので名栗村は上名栗区と下名栗区、それに村全体という三つの行政に分かれ運営されていた。したがって、経費も必要以上にかかり自治の複雑さと相まってとかく問題が生じがちであった。そこでこの村有林を村に統一することが

村の経済を健全なものにすることだと彌太郎は考え、その統一に努めた。この努力は村会議員としての同十三年まで続き柏木村長の代にそれが実ったのである。なお、三十五年頃の町村合併の際、名栗村が飯能市に合併されるべきとの圧迫があったが、それが成らなかったのはこの膨大な村有林ゆえである。

このように平沼彌太郎は家業とともに、家業に密接なつながりのある村や林業諸団体で重要な役割を果しながら、さらにもう一つ金融関係の重責もになっていた。彼が初めて銀行経営に携わったのは大正九年六月、父平沼源一郎らが創立に関わる飯能銀行に取締役として入行した時である。彼は昭和十八年六月に県下の銀行四行が合併するまでその位置にあった。昭和四年頃、飯能銀行は武蔵野鉄道に対して約二十六万円の不良貸付をしたのが原因となり同六年に取付騒ぎが起こったのは有名な事件である。そのため、同行の総預金額二五〇万円のうち、その半分くらいまで引き出されたが、残預金は不動産関係などコゲつきの貸付だったため急の資金化が難しく、結局同行を閉鎖せざるを得ない状況に陥った。そんな折も折、同行取締役会長で八十五銀行頭取でもあった綾部利右衛門が急逝した。そこで同行重役たちは彌太郎を会長に推し再建を懇望してきた。彌太郎はその時、情勢からかんがみ同行の再建は不可能とみていたうえ、仮りに引き受けたとしたら必然、彼の個人

資産を投げ出す覚悟が必要だった。で、彼は三ヵ月近く固辞しつづけたのだが余まりにも強い要請だったことと父源一郎が初代頭取だったという関係、地方産業の振興という年来の考え方から同七年二月、飯能銀行会長に就任した。

平沼彌太郎は会長に就任するやテキパキと問題の処理にあたった。山積した不良債券、ことに武蔵野鉄道の不良貸付の整理が大きな課題だったが、折から武蔵野鉄道では堤康次郎と根津嘉一郎二者との間で乗っ取り競走が演じられていて堤が債権の必要から武蔵野鉄道が手形を必要になったのを機に、同行は箱根と大泉の分譲地を手形と交換に手に入れることができた。この土地保有が信用回復につながっていき同行の先行きに光明が開き、取付騒ぎ以来五年で預金は二八〇万円と事件当時を上回るまでになっていた。飯能銀行の取付事件で有利な立場にあった武蔵銀行は飯能銀行の急速な蘇生で、その反動から内容が悪化し、その打開のために飯能銀行へ合併を申し入れてきたのは間もなくのことである。平沼彌太郎は、銀行業務、ひいては地方金融の安定を考え合併は好機であると判断して申し入れを容れ、直ちに合併契約が交換されて同十二年、新飯能銀行が誕生したのである。契約の中には彼が会長に、佐野作次郎武蔵銀行頭取が頭取に就任すると謳われていた。

ところが、同年の合併総会では彼は新行の会長どころか取締役からさえもハズされると

いう意外な事態が起こったのである。

彼は飯能銀行の建て直しの際、個人資産の半分は犠牲にするつもりであった。だが、全て順調に行き、その危険を回避できたことは彼をほっとさせていた。それで彼は、むしろこの時の突如の事態に対して深入りせずそのまま身を引き、以後一年半くらいを激務のあとの静養のつもりで彫刻と信仰とに打ち込んだ。この昭和十二、十三年の彼が公務から解き放されていた時期が、実は彼の一生に大きな転機をもたらしたのである。

ところで、この合併劇の事情をよく知らない株主たちは、一株五円以下だったのが額面以上で合併されたことは平沼会長の功績であるとして、彌太郎への同情と銀行側への批判の声が高まった。このため佐野は彌太郎をやむなく取締役にするという取りつくろいをしたのだった。

平沼彌太郎はこのように公私とも多忙な状態にあり、ほんのわずかに自由を取り戻したのは同十二、三年頃であったわけだ。しかし、支那大陸の戦況は次第に熾烈になっていて彼にも硝煙のにおいがまつわりつこうとしていた。その時、彼は母志げの遺言を思い起こし、死を意識し、観音信仰への道をさぐり始めたのである。その頃、山を歩き、そして測量し手入れを続けていたのだ。家業を基本とし、地方経済の振興にも奔走し、さらに信仰

の道へも入ろうとしていたわけである。その行動力、バイタリティには驚くべきものがあった。しかし、それ以上の努力がそれからもさらに積み上げられて行くのである。

第二章　観音堂と彫刻家・桐江

自ら困難を求めて

桐江平沼彌太郎は母の遺言で観音堂を建てようとしたエピソードは先にふれたが、今日の白雲山鳥居観音の母胎となったその観音堂は昭和十五年四月に完成したのだった。この観音堂は写真（三二ページ）のように岩礁の嶮しい斜面につくられた。この岩面を削るには大変な困難が伴ったが、これも例によって桐江自らツルハシで岩を砕いた。そして、この難しい地に堂を据えるために堂の前に高い足場をこしらえた。足場と簡単にいっても、なにぶん片方山の斜面に堂を置くわけだからその目の前の足場になる場所をつくるには、ずうっと谷を下った地点が立脚地になるわけである。その脚の高さは二〇メートル近いものになったのである。とにかく、この足場は困難な作業に大いに便宜となったが、このような桐江の企ては母の遺言を実現するために自ら困難を求めたように受け取れる。

このような姿勢はその後、今日に至るまで貫かれているものだが、鳥居観音三十年の歴史はここに始まったのである。そして平沼桐江の仏像彫刻の歴史もここに本格的に始まり、桐江の観音信仰は創作活動とともに深遠さを増し、信仰という抽象的なものが巨大な鳥居観音構想の一つ一つの実現になって表象されていく。彼の思想はいま具体的な形で見ることができるわけだが、すでにこのとき一つの観音堂完成時に、遠大な宗教的ビジョンが彼の内部に形づくられていたことは彼自身以外知らないところであった。

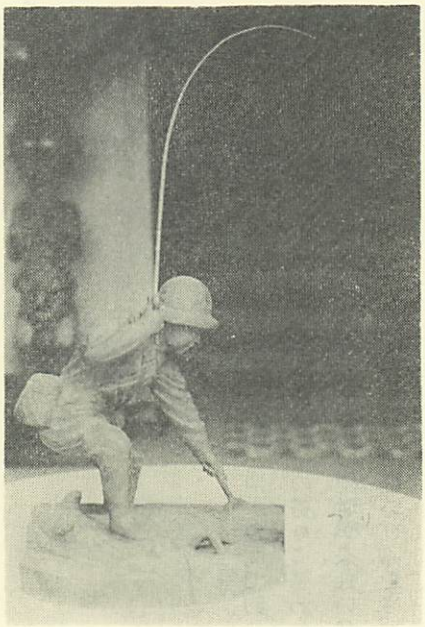
この記念すべき堂は赤坂離宮の設計者の一人である中里清五郎の設計、内部の漆塗は桐江の弟、浄による。この中に鳥居観音の本尊、聖観世音菩薩(丈二・三メートル)と梵天、帝釈天が当初安置された。聖観音は七観音やあらゆる観音の根本をなすものなので聖の文字が冠されている。落慶にあたって永平寺管長鈴木天山禅師が開眼し、『施無畏』と揮毫した扁額を納めている。のち、この聖観音、梵天、帝釈天は二度安置どころを移動することになるが、移動されたのちの今日、奥の院と称され現在、大黒殿となっているものである。

桐江、釣りに遊ばず

平沼彌太郎は桐江と号す。釣りきちがいの彌太郎にちなんで水野梅暁が厳子陵の次の詩からとって命名したものである。

一枝長繫碧琅玕　多在桐江渭水間
楊柳陰中驚鯉躍　蓼花香裏伴鷗眠
未看便者重徵聘　幾見漁翁独抱還
長占烟波与風月　此生贏得出塵寰

（ひとりの翁が釣竿とびくをさげて桐江と渭水の間で釣りをしている。柳の陰で突然鯉がはねたのに驚いたり蓼の花が咲き乱れその香りに誘われて舟の中でうたたねすると鷗がきて一緒に眠る。この日は王から迎えの使者が来ないので、のんびり釣を楽しむことができた。魚を釣ることが目的でないので軽いびくをさげてゆっくりと帰途につくのであった。あたりはもやに烟り月が出てきて何んともいえない景色である。よごれた世の



大正14年頃、釣りきちがいだった自分を思いおこし日光・湯川での鱒釣りの姿を彫刻したもの。

中から一日解放されたいへんよかった——という意）

彌太郎は二十五、六才頃まで毎月二、三回は日光の湯川に釣りに出かけるほど釣り好きであった。湯滝から戦場ヶ原に出る間の薄蒼とした原始林の中にところどころ大きな木が川の流れの中に倒れているといった深々として静かな渓流で釣りをするのである。その頃の戦場ヶ原はまだ畑も家もなく、鶯やいろいろな鳥が鳴き高山植物が咲き乱れ、竜頭の滝の上あたりは仙境に遊んでいるような気持にさせた。釣った魚は皆焼き、持ち帰るのに楽にし、また持参の米や味噌、じゃがいもなどで飯盒炊さんするという格別の味わいを楽し

んだ。昼間は釣れないので昼寝などして辺りの美しい風景にひたった。一人幽境に抱かれる快さがその頃の桐江を離さなかったのだ。梅暁が示した厳子陵の詩は正に弥太郎のその楽しみを表現したもののようであった。彼は驚くとともに桐江を号とすることを喜びとした。しかし仏教では、釣りは十重禁戒中の不殺生戒にあたるので、彼は以来、釣りから遠ざかった。

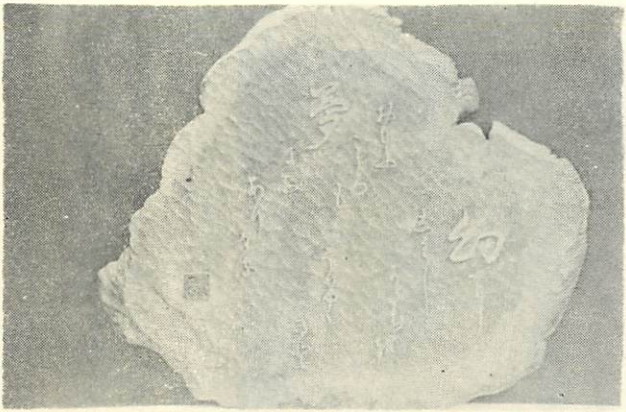
仏教彫刻に魅せられて

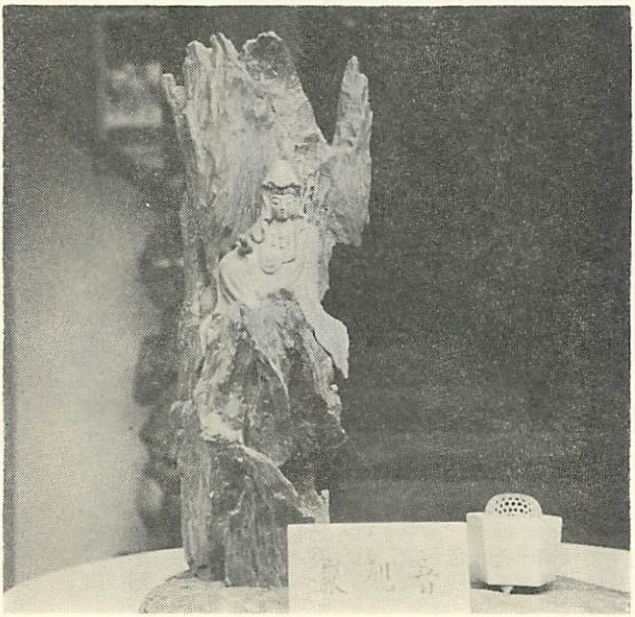
平沼桐江が彫刻に興味を覚えたのは、ほんのちょっとしたキッカケであった。それまで桐江は油絵が好きだった。物資に恵まれない時期で油えのぐ一本のお金を出せばクレヨン一ケースが買えたようなときに油絵が好きだということ自体がぜいたくであった。しかし彼はそれができるだけ恵まれていた。

昭和六、七年頃であったが、ある日、小学校に行っている長女のさつきが宿題をやっているのを居間のかたわらで桐江が見ていた。さつきは朴の木の板をもってきて木版を彫り

長女の宿題を手伝ったのが彌太郎が彫刻に入るキッカケになった。当初は木版から始めた。昭和7年から毎年，年賀状に十二支を彫ったこともあった。これはそのときの木版。

それで年賀状を出そうというのである。桐江は見ているうちに、「どれ、かしてごらん」といってノミを取り彫り始めた。彫っているうちに興味が湧いてきた。――これが彼の彫刻の道に入るキッカケであった。しばらく自分でいろいろの木を彫ってみたが先生についてみる気になり、練馬に東京での住居を定めてから近くにいた開発





前頁の写真上は昭和9年作で『夢』を木彫りしたもの。
下は昭和4年頃の作品『巌観音』

春光という彫刻の先生にまず手ほどきを受けた。それは彼が母の遺言を履行しようと、白雲山境内に観音堂を建てようと考えていた頃のことで、信仰心の目覚めとともに仏像彫刻に入った。しかし間もなく壁にぶつかり本格的な技術を習得する必要を痛感しはじめた。彼がよき師を求めていたころ、帝展を見に出かけそこで仏像彫刻の第一人者と目されていた三木宗策が聖観

鳥居観音奥の院が落慶した昭和15年に、寄進者、功労者に贈った桐江初期の主な作品

音を出品していたのを見た。しかもそこに三木宗策が居合わせ桐江はその場で弟子入りを申し込んだ。三木は心よく受けた。その後、桐江は次々に仏像を彫っていたが、仏像の表情に威厳や慈悲の相が出てこないことに内心苦しんだ。本郷にあった大円寺の住職服部太元

老師はこれを見抜いて、「素人が信者の拝む仏像を彫るなどとはもってのほかだ」と桐江を一喝した。このとき初めて桐江は真の信仰心がなければ本当の仏像は彫れないと悟り、西国三十三ヵ所の観音霊場巡りを思い立ったのである。これが十二年頃のことだ。その後、沢田政広、村岡久作などにも指導や協力を受け、平沼桐江は仏像彫刻家としても名を知られるようになった。

昭和二十四年以降の銀行頭取時代に公私とも多忙な中で顧客のための大黒天や大黒天型の貯金箱や要望に応じて養老院とか個人のための彫刻もした（これについては「大黒天由来」参照）。彼が元を彫って複製したものを数えると何万という数になろう。そして自ら鳥居観音に納めた彫刻などを合わせるとその数は千数百点に及ぶ。

こうして彼が彫刻を始めてから三〇余年間の作品の大作はほとんどが鳥居観音に凝縮され、いまその作風の経緯をしのぶことができるのだ。

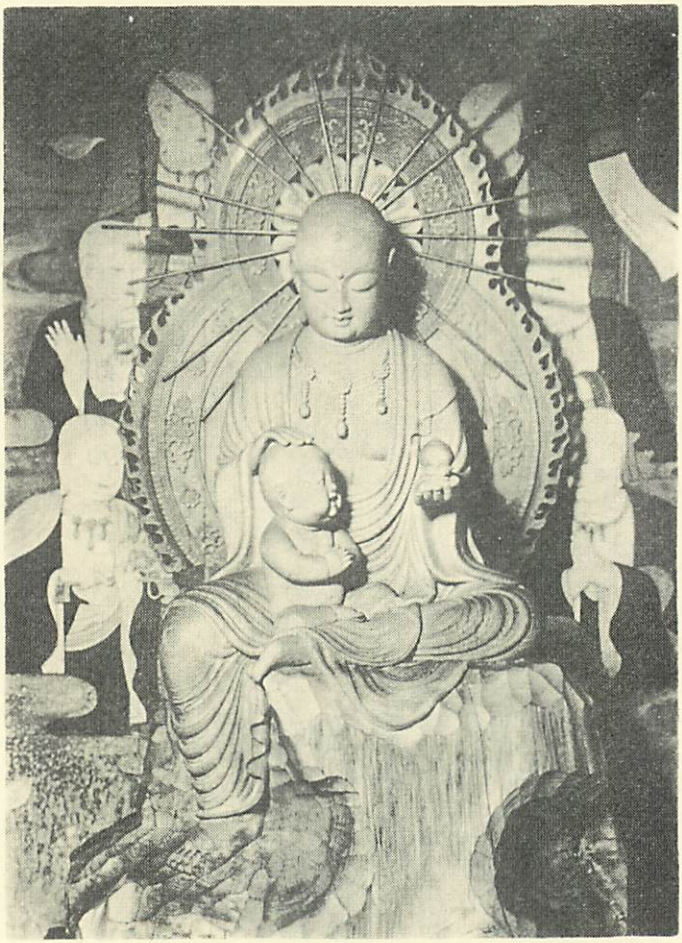
第三章　白雲山初期のエピソード

地蔵堂縁起

白雲山を左側登り口から上がった中腹に地蔵堂がある。堂は小じんまりして目立たないものだが、実は檜の大節を利用してつくった苦心の作なのである。地蔵堂の中には子育地蔵が鎮座しているが、これは檜の根を利用して台座とも一本の木から彫刻したもので、モデルは桐江の孫、当時一才の宏之である。これは彼が県議会議員をしていた十八年頃の作品で、空襲が激しかったので県議会がしばしば防空壕の中で行なわれた頃である。

丈は一・五メートル。この附近は白雲山に登るにあたって、ちょっと一息つきたい地点にあたり、堂のぐるりに木の椅子が用意されていて、登って来た人々はここでひとまず四囲のたたずまいに見当をつけてみることになるのである。

ここから少し下って、再び斜面を登ること五〇メートルほどのところに仁王門が立って



子育地蔵　昭和18年頃の作品。一本の檜の根でつくられた。
子供のモデルは桐江の孫・宏之一才のとき。

いて、鳥居観音の入口らしい雰囲気になる。仁王門の仁王尊が観音の門番である。仁王とは阿像と吽像である。阿吽の呼吸という言葉がうかがえる。阿像は丈二・四メートル、口を開いて右手を開き前に突き出した手は独鈷（どっこ）を握って後頭部のあたりに構えている。これは善を開く意をもつものだ。吽像は丈二・五メートル、口を閉じて左手を力強く握って構え右手は中段にもっていって機に臨む勢いがある。これは悪を封じる意を表わしている。

仁王門縁起

桐江は昭和十五年からこの仁王像の製作にとりかかっている。初めは仁王像の怒りの形相を迫力あるものにするのに大いに苦心し、自分で鏡をみて怒った顔をつくったりしてみたがなかなか思うようにならなかった。ついにいらいらして本当に怒ってしまったりすると、「あ、その顔がいい」などと家族のものが茶々を入れたりした。しかし、その間に彼が携わった主な公務は次のようなものであったから製作は遅れがちになった。

飯能銀行取締役会長（昭和7年～18年）

埼玉県森林組合連合会理事（同17年～23年）
埼玉県議会議員（同18年～22年）
埼玉銀行取締役（同18年～24年から36年まで同行頭取）
参議院議員（同22年～28年）
全国銀行協会連合会理事（同25年～36年）
大日本山林会理事（同25年～）

このほか多数の国体に関係し、多忙な日を過したこともあって完成までには一二年間を要し、仕上げは沢田政広が行なった。落慶式は三十七年十月に盛大に挙行された。――この仁王開眼の日には臨済宗管長峰尾大休老師がカゴに乗って登ってきた。ちょうどサンタクロースが網駕籠にゆられて登ってきたように思われたが、豪放なタッチで『大玄門』と揮毫した扁額を納め、そのもとで開眼の際、「喝！」と発した大音声が全山にこだましたので、なみいる来会者はドギモを抜かれた。

仁王胎内には桐江が縁起を著し、妻及び子供の写経などが鎌倉彫経箱二つに入れて納められた。

仁王門落慶　仁王像とも完成には12年間を費したのは桐江が多忙をきわめたのと戦争の影響だった。

松井大将書の碑

仁王門の前の木立ちの間に『宣揚皇道』と記された石板の碑がある。――大東亜戦争たけなわのころ、当時名栗村軍人分会長であった吉田喜一郎やほか役員たちが白雲山境内に山桜など奉納植樹した。その記念碑を建てるにあたって桐江は、かつて上海方面の最高指揮官であった松井石根大将の書いたこの文字を碑に刻んだ。終戦後、軍事関係の物件はことごとく焼き捨てられ碑も取り除かれたが、桐江はそのままこの碑を建てておいた。この碑文自体をいやがる人もあったが彼はこだわらなかった。松井石根大将は指揮官当時、前線で戦死した自分の部下二万三千余柱と中国人の戦死者の冥福を祈って、各激戦地の血に染まった土を持ち帰りその土で観音像をつくり建立した。これが十五年に建てられた熱海市伊豆山鳴沢山にある興亜観音である。

終戦後十年ほど経って、松井大将のゆかりのひとが名栗を訪ね、鳥居観音奥本堂の須弥壇の上に一枚の名刺を置いて行った。その名刺には「松井閣下遺墨の碑をよくそのまま倒

さずに置いて頂いたことを深く感謝します」と書かれていた。それからさらに十数年ののちの三十四年に興亜観音のそばに七人のお骨が埋められ碑が立てられた。それは吉田茂の

松井大将書の碑　「宣揚皇道」の字句が戦後イヤがられたが，桐江は感ずるところあって，頑としてその位置を移さなかった。

筆による「七士の碑」である。七人とは東条英機、松井石根、広田弘毅、板垣征四郎、土肥原賢二、木村兵太郎、武藤章であった。

その伊豆山に松井石根未亡人が住んでいる。桐江がその家を訪れたところ、松井夫人は涙を浮かべて桐江の訪問を喜んだ。

第四章　玄奘三蔵塔のゆかり

数奇な歴史のめぐり合わせ

大東亜戦争が勃発した翌年、昭和十七年には日本の主力兵力百万が中国にあった。しかし戦線はすでに膠着状態に陥り、汪兆銘政権を南京に擁立した日本軍の政略も効果なく、蔣介石軍の抵抗は全く劣えることがなかった。阿南惟幾中将の第十一軍が重慶、成都などへの南方進攻によって戦局の打開に懸命だった。――そんな頃の南京に守備軍として高森隆介大佐の率いる高森部隊があった。

十一月のある日、高森部隊は南京中華門外に稲荷神社を建てようと整地作業をしていた。そのある地点で地下九メートルほどを堀ったところ大きな石棺が出てきた。この報告を受けた高森大佐が現場へ駈けつけて調べてみると、その石棺の中には三百余点の宝物、文献とともに頂骨が納められていたのである。後から判明したのだが、これこそ今から千三百

年前に亡くなった中国の偉大な僧侶、玄奘三蔵法師の霊骨と遺品であった。

ところで、霊骨がこうした数奇な発掘のされ方をされるまでには長い長い時代の経過がある。一千年余の昔、北支の黄巣の賊（大匪賊）の叛乱の際、長安もその荒波をもろにかぶって玄奘の宝塔も掠奪破壊の対象となり、以来行方がわからなくなっていた。一説には心ある人が秘かに移動したものともいわれているが、そういう経過をたどったがためにそれまで全く所在がわからなかったのである。それをたまたま、中国から文化を取り入れてこれまで発展してきた日本の、そして文明の伝導国である中国へ今度は戦争のために赴いていた日本軍の手で発見されたのだった。ここに歴史の皮肉を見る思いがしないでもないのだ。

高森大佐はこの三蔵法師の霊骨はわれわれが所有するよりも、やはりお国の関係者に所属した方がよいと考え、蔣介石氏に返還する、と発表したのは至極当然であったといえよう。ところが国民政府側は、この戦争の真只中で謎めいたものを返却してくれるなどとは日本軍の宣伝に違いなく、デマだときめつけた。状況が状況だっただけに中国側がそう受けとるのもやむを得なかった。しかし、各宝物や石函の裏に印されていた刻字の書体の研究や考古学者や文化委員、高僧などの分析結果から間違いなく玄奘三蔵法師のものという

結果が確認されるに及んで、国民政府はようやく態度を柔らげ、いろいろやりとりがあったのち正式の返還交渉へと進んだのである。

翌十八年二月二十三日、日華両国代表数千名の集まる中で、日本側代表重光葵駐南京大使と国民政府代表、褚民誼外交部長の間で玄奘法師の遺品が返還された。国民政府はこのとき、霊骨塔を南京城外の玄武山に建立するために戦時下でありながら二千万ドルを注いだ。玄奘法師への敬意と信仰心の厚さに日本の関係者は驚いたものである。

この霊骨塔の落慶式がおわると直ぐ、中国側はあらかじめ分骨してあった頂骨の一部を日本にも分贈する旨の申し出があった。関係者はこれに感謝し、日本の仏教徒代表として落慶式に臨んだ倉持秀峰、水野梅暁が褚民誼外交部長から霊骨を受け取った。その後、汪兆銘政権がつぶれ、蔣介石政権が中国を圧倒した際、再び霊骨を中国に返還したことがあり、そしてまた、その霊骨が日本へ再度贈られるという変遷をたどった。そのころ国内は第二次大戦が激烈をきわめていた折で、東京に霊骨を置くことが危険になったため、埼玉県岩槻市の、中国にもある同じ名のお寺の慈恩寺に移され、その後、境内に塔が建立された。水野梅暁は霊骨塔は日本に一ヵ所でも多く建立されることが仏教界のためによいと考え、伊豆長岡の岡部長景と平沼彌太郎に分骨したのである。かくして霊骨は鳥居観音に迎

えられ、現在の三蔵塔建立への縁起になったのである。三蔵法師の霊骨塔は現在、山陰、東北など七ヵ所に建立されているといわれる。

分骨と水野梅暁の役割

分骨にあたって、玄奘法師の霊骨発見者ともいうべき高森隆介大佐は、何回か桐江に書翰を送り、「貴方の如き真の仏心ある人にお預け頂けたことを仏教タイムスで拝見して感じ、一度拝眉の上実情を委しく申し上げ、今後玄奘三蔵法師の国際的顕彰、親善にも充分御協力を願い度いと存じます」と安堵の気持をあらわしている。また、桐江や岡部長景に分骨する際にも高森隆介は彌太郎の快諾を喜び、「御承諾御返事有難く存じ上げます。貴意を尊重して日本分教連盟と良く連絡して御分骨を大いに意義あらしめるものにいたしましょう」と抱負を述べ、一度上京の機を得て具体的にこれからの事など話したい、といってきたが、その一年ほどのちの昭和三十年の夏、高森隆介は亡くなった。

白雲山に三蔵法師の霊骨を分骨する役割を果した水野梅暁禅師の彫像。三蔵塔の一階壁面に飾られている（41年5月完成）。梅暁は中国に精通している点で当時随一といわれた人物である。

白雲山に三蔵法師の霊骨を迎えるに至る導師というべき水野梅暁について少し詳しく紹介しておこう。彼は中国から三蔵法師の霊骨を受けてきた一人である。彼は禅宗に僧籍をおいていた。また彼は中国に精通していた。当時この人以上に中国を知っている人はいないといわれた。その知識と経験を買われて外務省の嘱託の形になり、このことは表立って知られていないが、戦時中の対中国外交の黒幕ともいわれた。当時、中国戦線を無謀に拡大しようとしていた軍に対し、「東三省までとどめるべきだ」と注告したことなどから憲兵につけ狙われたことも何度かあった。彼は寺ももたず地位も求めず中国を行脚することを一つの目標としていたので、中国体験は豊かで、満州皇帝をはじめ蔣介石ほか中国要人との交渉は想像がつかないほど広いものであった。国内においては犬養木堂、佐々木照山、頭山満などとの親交が知られている。

日本に戻っていた昭和六年頃、彼は病気で麹町病院に入院した。主治医は柳川華吉博士であった。彼は桐江の妹（須美子）の夫である。梅暁の病気は回復に向い静養地として名栗を選んだ。これは柳川博士のアドバイスによるもので平沼家にあずけられた。このときから平沼家と水野梅暁との交じわりが始まった。病気は三ヵ月で回復したが、それ以来、梅暁は平沼家を我が家のようにしばしば訪れ、炉端で薪を焚きながらアジアの情勢や仏教

のことなど、四十才になり名栗村長になる前後の桐江一家と語り合うことがあった。梅暁は名栗を好み、平沼家に安らぎを見出していたようだ。それから約一〇年の後に三蔵法師の霊骨が発見され、霊骨が梅暁と平沼家との関係を一層深いものにするのである。

戦争は激烈化して遂に本土はアメリカ軍の爆撃に曝され始めた。東京は波状空襲に見舞われ交通・通信は杜絶、物質不足が著しくなっていた。そんな状況にあったときも梅暁は慈恩寺に建立する霊骨塔のため資金集めに奔走していた。頭陀袋を下げ乞食のような姿で全国を行脚し、資金や建築用物資の寄進を求めて回った。そのうち東京の空襲はさらに激しさをまし、麹町にあった梅暁の家も危険になった。

桐江夫妻はそれを心配して梅暁に「名栗へ疎開したほうが安全です」と誘ったが、彼は「陛下がおられるのにわれわれが逃げ出すわけにいかん」といって頑として桐江らの申し出を断わった。「それでは家財や貴重品だけでも安全なところへ移しておいては」とすすめると梅暁はそれに応じた。梅暁が手当りしだい選りわけた家財トラック一台分が疎開した。このことがあって間もなく激しい空襲が東京を見舞った。翌日、梅暁が、とみを訪ねてきた。「奥さん、焼けてしまった」とガックリ肩を落していた。梅暁もやむなく名栗へ空襲をのがれなければならなかった。終戦後、東京から疎開した品々を整理しようといっ

水野梅暁のお墓　念願の塔完成を見ずじまいにその波乱の生涯を閉じた（鳥居文庫の近くにある）。

て包みを広げると、梅暁は「あ、これは無事だったか。お、これも無事だったか」と声をあげて一つ一つ手にとって喜び、いまさらのように品々をいとおしんでいた。

桐江がそのとき梅暁からみせてもらった彼の家財やコレクションの中には、中国の重要人物の書画文献など数百点があり、中国文化研究にも大いに参考になるものであった。梅暁は「老後は、この名栗で中国文献を整理して目録をつくったうえで鳥居観音に奉納したい」といっていたが、いま鳥居観音にある文庫が梅暁のその志を継

いで完成したものである。

戦後の昭和二十四年、名古屋・日泰寺で仏舎利奉安五十年大法要が営まれたとき、梅暁は三蔵法師の霊骨をもって名古屋へ出かけた。その際、戦後日本に初めてインドからやってきた象の花子さんの背に乗って駅から日泰寺までの行列に加わり、日泰寺では荘厳な儀式のうちにお釈迦様と三蔵法師との感激の対面を実現した。この礼拝を終えて帰京した彼は練馬区江古田の桐江の家に立ち寄り、大役を果した喜びを語った。梅暁は喜びを語るうちにも相当疲れてみえたので翌朝、桐江は慈恩寺の塔の運搬を引き受けている石屋まで車で送ったが、梅暁は慈恩寺に着くと病臥に伏し、十一月三十一日、その波乱の生涯を閉じた。彼が第二の故郷とした名栗の、鳥居観音の三蔵塔の完成を遂に見られなかった。

塔建立への一大悲願

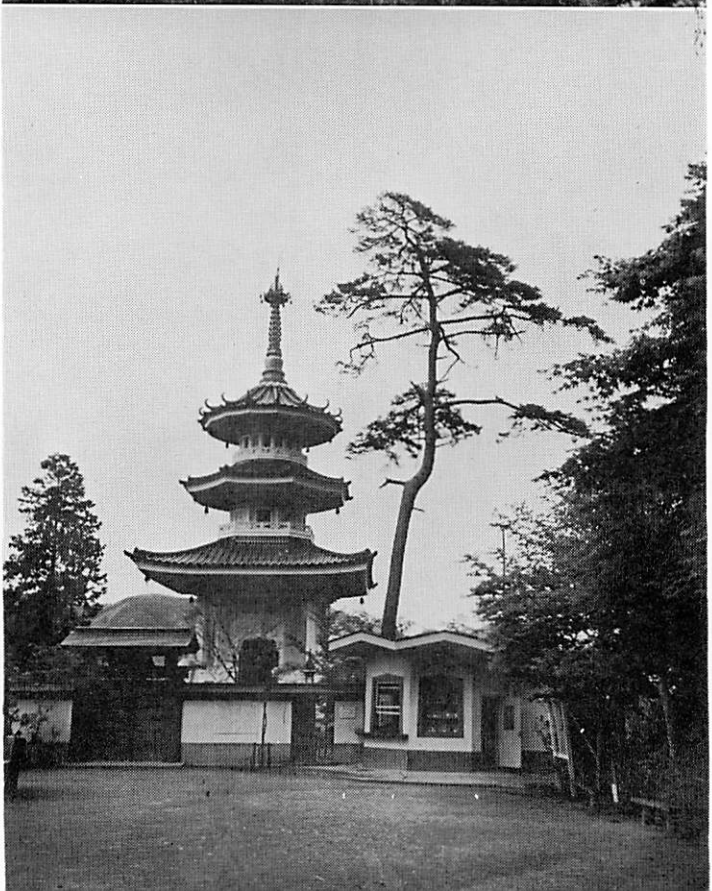
このようないろいろな因縁があったことは桐江を一層奮起させた。梅暁の志を継ぐことは、すなわち玄奘法師の霊骨を慰めることであり、そして鳥居観音にもう一つ大きな魂を

注ぐことになる。これがひいては日中文化の親善にもあずかるところ大きい。こうして桐江は白雲山頂に玄奘三蔵法師霊骨塔建立の大悲願をたてることになる。

そのころ桐江は、練馬の自宅に彫刻のためのアトリエをもっていたが、ここで三蔵塔建立の想を練っていた。参議員、銀行頭取、仏教団体役員、その他公的団体の重要なポストにあったときである。何十回と知れず塔の位置、建築図、周囲の整備について構想を書き換えた。アトリエの電灯は夜半から明け方までつきっぱなしの日が何日もあった。そして昭和三十二年の暮のある日、ついに構想は固まった。霊骨塔の模型は日、中、印度三国の仏教美術の粋を集め中東の宗教彫刻をも参考にするなど彼の信仰と仏教彫刻に対する考え方のオリジナリティがよく表われたものであった。

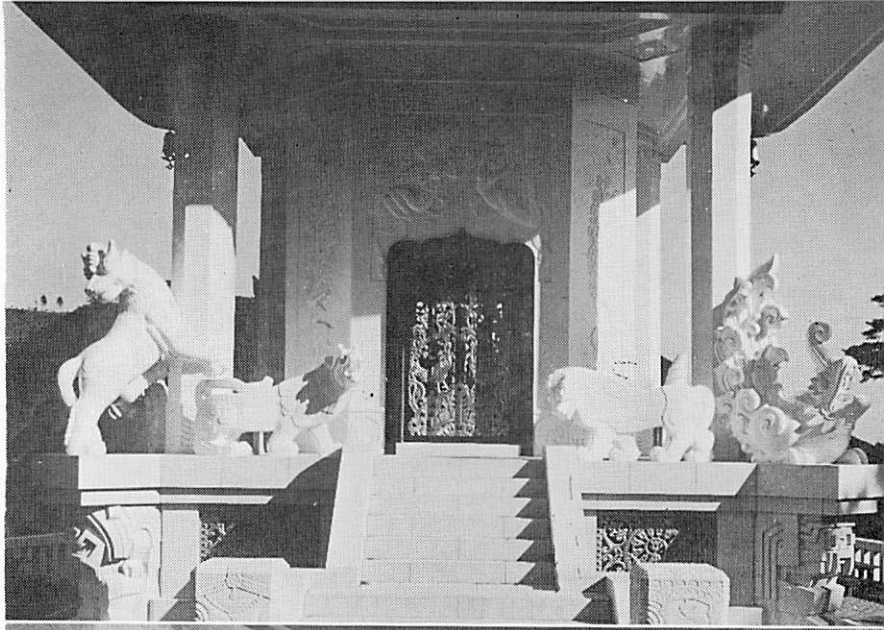
ところで彼には、この霊骨塔建立にあたってもう一つ大きな願いがあった。それは、水野梅暁は霊骨塔建立については「現在日本において、〝この人は〟といわれるような第一人者千人の賛同を得て後世にその名を残したらよいがなあ」といっていたことを思い出し、この聖業達成に現在日本で活躍している各界のトップから発起人になってもらおうと発心した。それから彼は矢立てと墨をもって政界、実業界、宗教界、その他の分野で指導的な立場にある人々に直々に会って署名をもらって歩き始めた。もちろん妻とみのほか桐江を

白雲山を見上げると左に三蔵塔，右に大観音像がひときわ高くそびえている



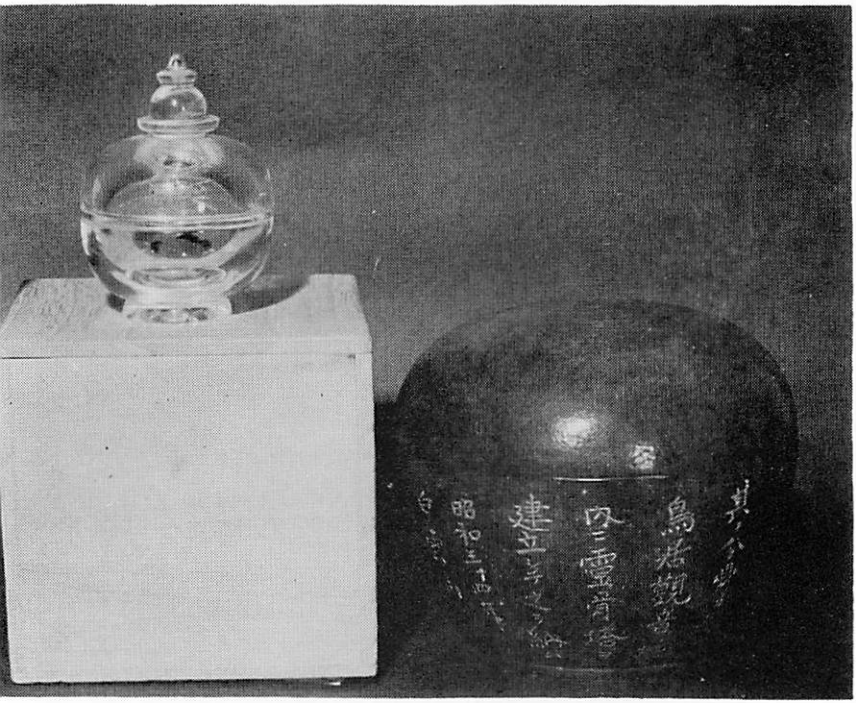
上は大観音へ導く道路の途中からみた三蔵塔。木々の豊かな色彩に白亜の塔がよく映える。下は塔前の広場から全景をみる

三 蔵 塔 全 景

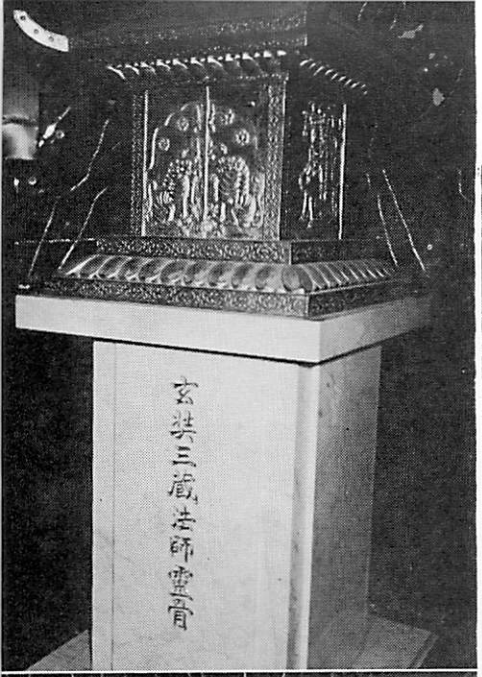


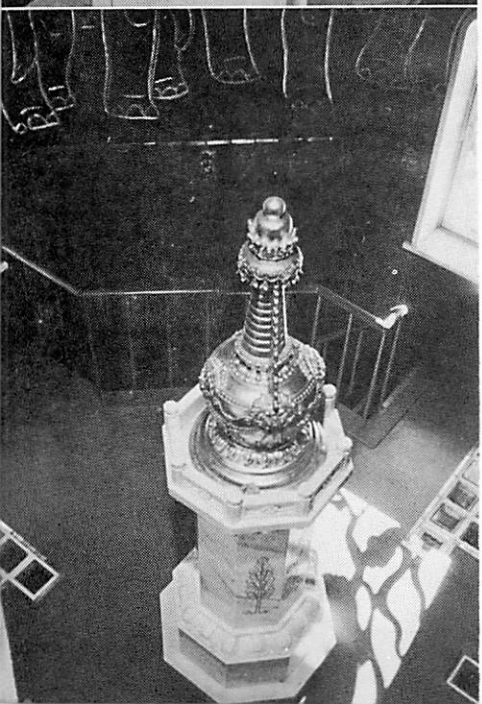
上は塔正面入口。柱には想像上の深海や深山の獣の彫刻が配され塔を守る。
下は回廊の壁画大写し（沢田政広作）。てすりの竜は桐江の作

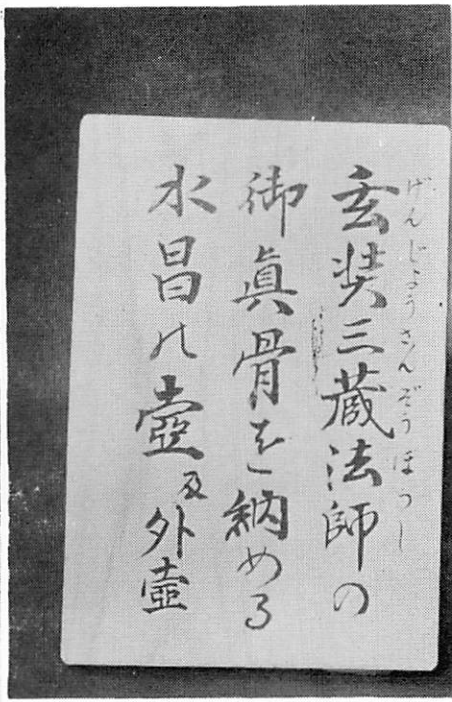
塔内の壁面には三蔵法師の一代記がけんらんたる筆致で彫り込まれている



これが重い歴史を物語る玄奘三蔵法師の
霊骨が納められている水晶の壺。白雲山
に生きづく大きな魂の一つである。







左上が三蔵法師の納骨塔。
下は仏舎利塔。
（台座は大理石）。

三蔵法師入寂1300年を記念して桐江が製作した銅像。高さ４メートル

援ける人々も協力して回った。そしてその悲願は数年を費して三百名の署名と賛助者三千余という形になって達成された。（巻末参照）

三十三年二月六日、東京・八重洲ビル八階ホールで発起人総会が開かれ役員に次のような人々が名をつらねた。

◇発起人総代＝石橋湛山　◇理事長＝永田雅一　◇理事＝石橋湛山、永田雅一、高階瓏仙、菊地寛実、丹沢善利、小佐野賢治、大沢雄一、佐野友二、鷲見保佑、飯塚孝司、秋元順朝、石田庄吉、木村寅一、神野金之助、滝島総一郎　◇監事＝諸井貫一、山田忍三、平岡仙之助、田辺留次郎、南景樹

塔建立工事は困難をきわめていた。建立地は白雲山山腹の標高五〇〇メートルの地点で車が登れない三方山に囲まれた場所である。桐江は感ずるところがあったので無理を承知で強行し、材料運搬のための車道を先ず切り開いて行った。しかし、急斜面なため道は雨で何回も流された。現在完成している車道もかなり急勾配だが、当時の工事の困難さを伝えるものとして記念すべき道路ともいえるのだ。塔内の設計では、かつて桐江がインド、パキスタンなどアジアの仏跡と中近東の宗教遺跡を見学した知識をもとに、三蔵法師ゆかりの中国、インドなどの古代仏教美術、建築様式を取り入れた。桐江が各国を回った体験

境内を散策する三蔵塔建立発起人。右から佐野友二，石橋夫人，石橋湛山，菊池寛実，丹沢善利の各氏

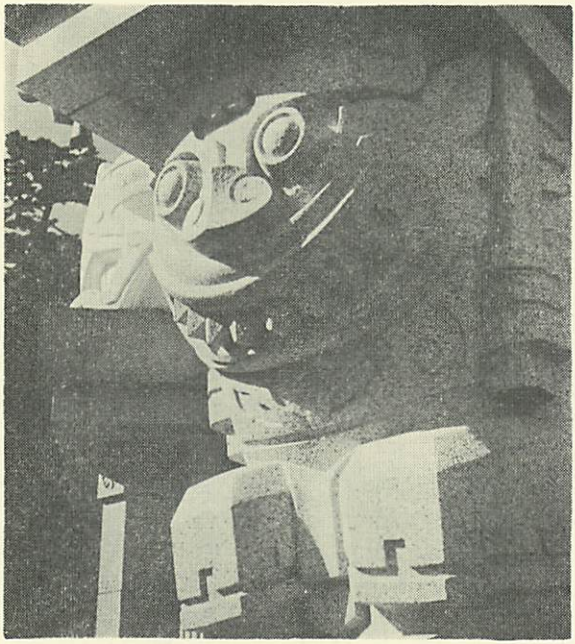
は「日本のこれらの仏教美術は日本のこれまでのお寺にある古美術をマネしてもしようがない。日本にある仏教の〝元〟は全て外国にある」という考えを固めることになった。そして、インド美術が幼稚なところがあるが原始的なものを伝えていること、中東、ギリシャの宗教美術が巨大であること、千年、二千年前の作品が今日にピッタリ適合していること――など桐江を大きく刺激した結晶は次々に独創的な形で生み出されて行っ

た。例えば大観音の堂宇の窓にステンドグラスを採用した。初めはキザさが感じられなくもなかったが、アークライトを入れると豪華な雰囲気をかもし出して見事に調和したのである。その大観音と付随する彫刻はイスラエルなど中東の宗教美術様式から大きなヒントを得ている。それらは日本の様式と調和した好例である。

彼がつくり出している独自の東西両洋の宗教美術の混合は、いまだ渾然としていないところもあるかもしれない。しかし、それが百年、千年後の時代に見るとき必ずしも渾然としないままであるとはいい切れないだろう。その時代にむしろ最も適合した美術様式になっているかもしれない。桐江のそう願っての構想なのである。

五月十五日に塔の上棟式が行なわれ、引き続き工事が重ねられて内部装飾壁画などが仕上がった十二月八日、起工式以来二年半を費して、玄奘三蔵法師の霊骨塔の落慶式が挙行された。塔は鉄筋コンクリート造り、純白色で総高三三メートル、地下一階、地上三階、延べ四十三坪。出隅付四角形基壇上に八角形の柱を建て、地階は休憩室で四囲堅固に発起人と特別寄進者の名が永久保存できるよう刻印されている。

一階塔身は隅切八角形で方形屋根が架せられている。中二階中央には堅牢な厨子があり、その中の水晶壺に三蔵法師の霊骨が納められていて、さらに銅壺にそれを納めたくさんの



塔基壇の四隅に配されている邪鬼。一見して目立たぬところにも入念の彫刻がみられる

真珠、宝石でうずめて奉安してある。周囲の壁画は児玉希望の作で、三蔵法師の西域記を「伝経」「受難」「盛儀」「訳経」の四つの場面にわけて表現している。

二階は八角形の塔身と屋根で、仏舎利塔があり、三階は展望台になっているが、円形塔身に十六角形の屋根を架し、いずれも銅板瓦葺き仕上げ。頂上に金色の九輪（水煙付き）がある。

階段下正面には翼をもった四人の天女に囲まれたブ

ロンズの大香炉がある。これはインドの美術館にあったものを採り入れたものだ。正面入口と背面出口の扉は金色に輝く孔雀のすかし彫りで天平の端麗さと桃山の豪華さにインド美術を加味したものだ。外壁セメント彫刻は日輪を形どり、壁面レリーフは釈迦誕上の図、諸菩薩浄土の図、基壇四方の特異な彫刻はあるものは深山の猛獣を形どり、あるものは深海の魚族を神格化したもので、これらが競って霊骨を守って〝万物仏性あり〟という仏の教えを象徴させている。

塔の裏側からアークライトで照明ができ、夜間は塔全体が大空に浮き彫りされたようになる。平沼弥太郎が困難な地形を選んだ理由の一つは、この夜景を見ることで理解できるといえるかもしれない。

玄奘三蔵法師のこと

玄奘三蔵法師はいまから千三百余年前、中国は隋の文帝の仁寿二年（西暦六〇二年）に河南の古都洛陽の東約七〇支里にある緱氏城の東郊陳堡谷の陳という名家の末子として生

れた。

幼名を褘といい、少年の頃、洛陽に出て実兄の長捷のもとで出家し仏道修業に入った。玄奘が十三才のときに、当時の隋の煬帝が二七人の出家を採用する『度』の試験の触令を出した。この試験を受けるため全国から三千人余の秀才が集まった。試験にはそのときわずか十三才の玄奘がトップでパスした。このことは千三百年経た今日まで例のないことで、さしずめ小学生が博士論文に通ったようなものである。試験委員たちがその少年の年令を調べてみて一様にびっくりした。この試験に二十才以下のものがパスすることがまずなかったからだ。そして、十三才の少年がパスするということは、われわれの良識も疑われはしまいかという意見が出るに及んだ。それで、今回はこの人は見送ろうという空気が強まった。ところが試験の委員長で、隋で一番といわれた長老、大学者の鄭善果が非常に怒り、「年がいけないとはどういうことか。五十年学んでも凡才は凡才、三年学んでも秀才は秀才だ。そもそも試験というものは先生にいわれたこと、あるいは本に書いてあることを全部覚えてそれを全部完全に書けば百点満点のはずである。ところが百二十点、百五十点つける答案というのもあるはずだ。それは何かといえば、聞いたことを全部心の中で理解し、それ以上の答案が出ればこれは百点以上のものだ。この答案がそれだ。こういう天才があ

らわれたことは中国の仏教界にとって大変ありがたいことだ」といい、長老は涙を流した。委員の中の一人はこれをみて、「長老はどうして泣かれるのですか」と聞くと、「自分は徒らに年をとって八十二才になった。この少年は今から一〇年、二〇年と勉強したなら全中国を救う生きた仏になるにちがいない。それまで私の寿命が待ってくれない。この少年が生きた仏になったときに仏果を施してもらうだけの寿命がないのが悲しいのだ」とこたえた。

このようなエピソードなどで知られるように玄奘はその頃からすでに神童の評判が高く、十三才で涅槃経を民衆に講釈し、それが師匠よりもよく理解しやすいものだったので賞賛されたという。二十才になって長安に赴き、法常、僧弁という二人の高僧の教えを受けたが、「仏門千里の駒」（仏門まれにみる天才の意）と師を驚嘆させている。

玄奘は仏道に精進し仏典を研究するにつれていろいろと疑問な点が出てきた。それで彼はこれを徹底的に究め誤りを正すためには釈迦が生れた天竺（インド）に行って梵典（原典）を研究する以外に方法はないと考え、天竺留学を時の太宗皇帝に申し出た。ところが皇帝は唐もやっと安定したいま、西の国々を刺激したくないといって玄奘の申し出を許可しなかったのである。玄奘はそれでは無断で越境するしかないと決めて二十六になった貞観元

年秋八月、ひそかに長安をぬけ出した。当時、国法として西は西門関（甘粛省の西端）から外へは出られないことになっていたので途中、彼は都督（役人）に捕まり長安へ送還されそうになったが、慧威法師という人に助けられて国外へ出ることができたのである。慧威法師は玄奘の人格、識見に驚くとともに、その求法の熱意に動かされたもので、自分の弟子である慧琳、道整の二人を玄奘に託して西への旅の便を計ったのである。この辺のエピソードから、よく知られる「西遊記」（三蔵法師と孫悟空）のお話しを思い出すことであろう。

玄奘たちはその後、中央アジアのゴビ砂漠や天山の嶮路を踏破するなど人間わざとは思われぬような大冒険旅行を続けたあと、パミール高原の高昌国に入ったとき王様が玄奘の壮途にいたく感心し学資として黄金百両、銀三万枚、綾絹五百匹、馬三〇頭に人夫二五人を与えたうえ通過する国々の王様に玄奘の保護かたを依頼してくれるという幸運もあって、一年余経って目的地の天竺に入ったのだった。

天竺に入ると玄奘は釈尊ゆかりの仏跡を次々に巡り歩き、一方、驚くほどの精力で各地の国王、学者、高僧を訪れ、歓待を受けながらも玄奘の研究が積み重ねられていった。中央インドの大マカダ国の戒日王を訪れたとき、王は形式化した小乗仏教に飽き足らずにい

たので玄奘の職見にたちまち打たれ一八ヵ国の国王、高僧それに学徒千名を主都曲女城に集めて一八日間の大法筵(講演会)を開いた。玄奘の主張する大乗思想を聞いた聴衆は誰一人としてそれに異議をさしはさまなかったので王様は大いに喜び自ら帰依したのだった。このことがさらに玄奘の評判を天下に高めるに至る。

玄奘はこうして一六年間、インドで勉強生活を送ったが、インドを去るときは馬二〇頭に梵典六七〇部を積んで天山南路を経て帰途についた。帰路も来るとき以上の苦難があったが、貞観十七年、やっとウテン国という唐の国境にたどりついた。そこで玄奘は「一七年前、国法を破って越境し、天竺諸国を経ていまようやく聖願を達成して国境に到着しました」といって使者を太宗皇帝のところへさし向け進退うかがいを出した。これを聞いて皇帝は非常に喜び特使を出して玄奘を洛陽に迎えたのである。そのときの太宗皇帝の迎えの言葉は次のようであった。

「師が真理の道を異域に求め、いま帰国されると聞き歓喜無量である。速かに来って朕と会われよ。異国の僧で梵語や経典に通ずるものがあったら任意に同行してくるがよい。すでに沿道の国々に勅を下して師のため人夫、乗物など不自由なきように命じてある。また敦煌(とんこう)の役人には流沙まで、鄯々の役人は沮沫まで出迎えるよう命じておいた。……」

大きく手を広げ我が子を迎えるような気持が溢れた言葉であり、また玄奘の帰国が唐にとって非常に大きな文化的意義があったことがわかる。こうして玄奘は貞観十九年正月六日、四十四才になって母国の土を踏んだ。

以来、玄奘は持ち帰った梵典の翻訳をはじめる一方、中央アジア、インドの旅行記、地理書一二巻などを書いて太宗皇帝に贈った。

皇帝は大いに喜んだが同時に「師のような偉人が仏教だけに終るのは惜しい。国政に参与してほしい」と何度も勧めた。しかし玄奘は深く決するところあって固辞しつづけたので皇帝もついにあきらめたが、仏典の翻訳などできる限りの便宜を計るよう指示して玄奘の仕事を援助しつづけたのである。

玄奘は生来、長身白皙で血色よく眉目は画いたように端麗で、常に清潔な白木綿の衣を着用していたと伝えられる。声は澄み言葉は爽かで対話の相手を倦ませなかった。長時間、人と語っても態度は崩れず、歩くときはあせらず、前方を直視して目を動かすことがなかったという。態度の落ち着いて清らかなことは池の中の蓮花にたとえられるほどで、自身は戒律を厳しく守ったが他に対してはまことに寛大で、自身は静かな孤独を楽しみ交遊はあまり好まないほうであった。長く師に仕えた道整も「言に名利なく行は虚浮を絶つ。…

…倡ならず諂ならず行蔵時にかなう」とほめたたえている。

玄奘は竜朔三年（西暦六六三年）に至るまでの二十年余を翻訳、講演に専念し、七七部一三八〇巻という超人的な大訳経を完成したのである。また同年十月二十三日には満六年一一ヵ月を要した「大般若波羅密多心経」六〇〇巻の訳経を成し遂げた。

最後の筆を擱くと玄奘は合掌して一同に向い、

「この経こそ国を鎮め天下の大宝となるものである。人々よろしく踊躍慶賀するがよい」

といった。

翌年二月四日夜半、玄奘は病臥し、同五日夜半、長安王華宮で眠るように大往生をとげた。寿令六十九才。日本の天智三年五月のことである。

上は33年に完成した本堂。本堂自体美術品のように多くの絵画，彫刻が施された。下は本堂屋根の寄進者名を記した瓦。数は１万１千枚

第五章　本堂と七観音

明確になる独創性

桐江は昭和十五年に観音堂を建て、次いで仁王門を完成したが、このことがしだいに世に知られるにつれ支援の声も多くなり、自らの手による白雲山の整備が進んだのを機に、本堂の建立に着手したのは玄奘三蔵法師の霊骨分骨の話が決まった同じ二十九年のことである。またこの年は鳥居観音が宗教法人の認可を受けた年でもある。

本堂は五年の年月を費して三十三年五月十三日に完成した。この本堂の完成前後に、すでに桐江の頭の中に三蔵塔建立の構想が固まっていたわけである。

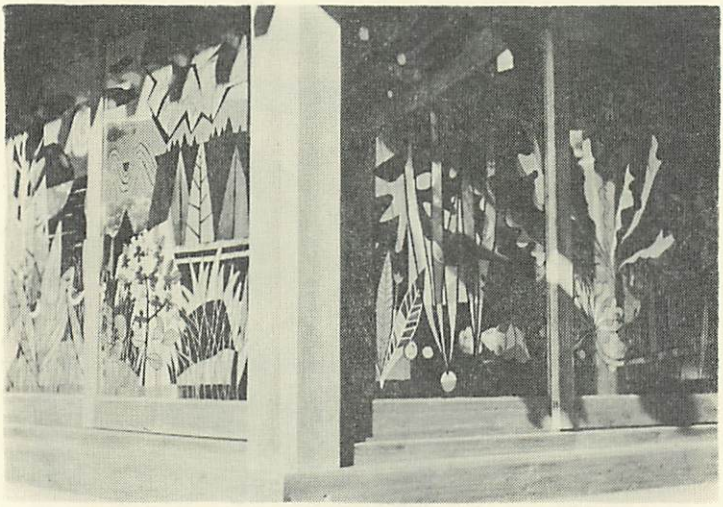
高階瓏仙禅師によって落慶供養がなされたこの本堂は単層入母屋造り向拝付き本瓦葺きで、飛鳥朝建築様式に現代性を取り入れて簡潔なものになった。屋根の中央には沢田政広作のブロンズ製丈二・五メートルの天人像が地上に舞いおりる姿にあり鬼瓦は菩薩の顔を

鳥居観音入口　正面の峰の上に大観音がのぞめる

30人の著名画家によって描かれた花の天井絵

形どったものである。本堂の設計は多田篤一による。

本堂は各種美術工芸が施されていて総面積ざっと三〇坪である。本堂正面に不空羂索観音、向って右に十一面観音、左に如意輪観音、須弥壇の両角に伽陵頻迦が安置され



本堂の窓ガラスは８ミリのものを二枚合わせた。その間に山の幸，海の幸の絵が描かれた（互井開一作）

ていた。（伽陵頻迦は、釈迦説法のおり、空中で美声をもってたえなる音楽を奏したと伝えられる）また桐江の両親の胸像が目立たなく置かれていた。

堂内は壁画で埋められている。四囲の絵は観世音の住むという補陀落迦山の風景だ。名栗は年間四千ミリと雨量の多いところで、そのため湿気が強いので壁画はさわらの木に描かれて張りつけてある。なお絵は野生司香雪の作で、完成までの三ヵ月間、この本堂で描きつづけた。窓にも独特の絵が描かれている。中央入口のガラス扉は

八ミリのものを二枚合わせにしたもので幅二・七メートル、高さ二・二メートルで小川潮人作の直径一・五メートルの大法輪、四隅に梵字が描かれている。中央のサンはブロンズ製。四囲の窓は六ミリのガラス二枚合わせで、互井開一が色彩豊かに現代的タッチで自然、ことに山と川、人とけものという対比を描いたものである。

また本堂正面に額があるが、これは足利紫山大禅師が百才のとき書いたもので『白雲山』と認められ、四隅に四天王が配されている。さらに左右の側柱に認られるのは大休老師の豪放な筆法による『生滅滅已寂滅為楽』『諸行無常是生滅法』の十六文字である。平沼とみが彫ったもの。このほか先の天井画を彩る四季それぞれの代表的な花々が三〇人の画家によって描かれ、すでに本堂それ自体が一つの美術品の文庫になっているといえる。主な花と作者名は次のとおり。

芍薬〔橋本明治〕　鉄線花〔加藤栄三〕　煎子花〔森田沙伊〕　朝椿〔森白甫〕　紅葉〔吉岡堅二〕　泰山木〔山田申吾〕　菖蒲〔加藤東一〕　芙蓉〔大山忠作〕　無花果〔三尾雄治〕　薔薇〔伊藤万蟹〕　朝顔〔堅山南風〕　牡丹〔郷倉千靭〕　洋蘭〔畠山錦成〕　秋のめぐみ〔岩田正己〕　黄蜀葵〔常岡文亀〕　蓮花〔浦田正夫〕　ゆり〔佐藤囹夫〕　起久〔大宮俊興〕　鶏頭〔川崎鈴彦〕　小菊〔堀文子〕

仏像彫刻つぎつぎに完成

本堂建立と併行して、その間にも七観音の製作が精力的に進められており、桐江の創作意欲はますます盛んになっていた。

如意輪観音はそうした昭和二十八年に着手されていたものである。高さ二・八メートルになるこの観音像は東京・小竹町の自宅の天井を抜いた即成のアトリエで製作された。如意輪観音は「仏説観自在菩薩如意心陀羅尼呪経」というお経から生まれ、衆生の願望や福徳を満足させ、有情の煩悩を受け入れて、これを済度させるご利益があるとされている。桐江は製作にあたって、ことに仏像の尊厳を傷つけない範囲で現代の感覚を生かそうと努力し、女性的円満を表わすように全て丸と陰陽をもって色彩している。現代感覚の導入という点については桐江はその後どの彫刻においても試みている。

この如意輪観音像はことに、桐江ののちの作品で女性的美しさを追究した形の作品がみられるが、その意味での最初の作品ともみることができるかもしれない。というのも、納

二年がかりで三〇年に完成した如意輪観音。七観音の桐江第三番目の作。色っぽいなどとの批評も出された

自宅座敷で製作中の桐江。当時まだアトリエをつくっていなかった

経式を終えたこの像はしばらく日興証券の遠山元一の配慮で丸ビルの同社応接室に二年ほど置かれていた。したがって、よくこの像は来客の目にとまり、「なかなかの美人ですなあ」とか「肉感的で人間味がある」などとの感想が聞かれたものだ。

桐江はちょっと当惑顔に「おもしろいご批判をいただき参考になりました」と記している。

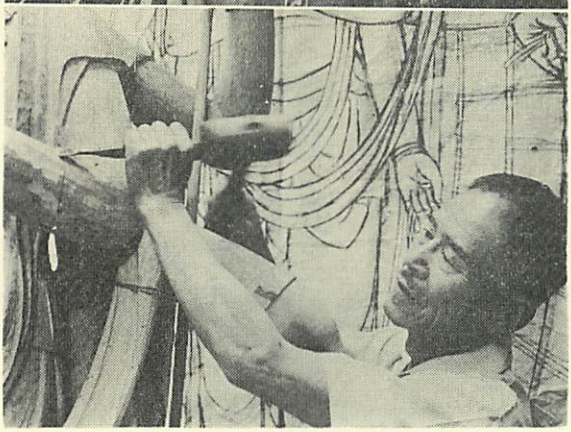
この像は右足だけ組んでおり、したがって左足は垂れていて手が二本のところから弥勒菩薩と間違われるが、この形のものも他にも見受けられる。衣の紋と台座の彫刻は、製作当時に水玉模様が流行していたのでそれを基調にすべて円形と陰陽の模様にしたところが

特長で、こういう点に現実の世相の一端を取り入れるところに桐江の一種のユーモアが感じられる。光背もまた独自のものだ。

像の胎内にはいずれの作品でもそうだが、縁起が記され、写経が納められている。これには高僧十三師のほか妻とみ、長男邦彦、花子、その子四人、それに内田さつき、山崎まりえのもの、それに約六〇個の貝一つ一つにもお経が納められた。なお開眼は三十年二月、塩入亮忠大僧正によって行なわれた。なお、いずれの観音像とも納経できるように空洞があるが、これは日割れや腐蝕を防ぐ科学的な効果があり、昔からの仏像彫刻における一つの知恵であったということができるだろう。

「如意輪観音に引き続き不空羂索観音（十二尺七寸）の謹刻を発願し二年余を費して完成に近づきたるを以て、塩入亮忠大僧正及関係者役員にて胎内納経式を行う。納めるもの釈迦如来の木像、写経五巻、其他数点なり。光背は沢田先生、台座は村岡先生、彩色は小川先生に各援助を求む。

須弥壇には十一面観世音（十尺二寸）と如意輪観世音（九尺二寸）と併せ三体を安置す。本堂、庫裡も五年を費して大方完成せるを以て五月吉日を卜して曹洞宗管長高階瓏仙



不空羂索観音は三二年に完成。不空とは「衆生の心願空しからず」の意。高さ三・八メートル。下はノミをふるう桐江

禅師導師の下に開眼落慶式を挙行せんとす。

本堂建物は飛鳥朝風に現代文化を加味す（多田技師）。……（略）かくて二十余年を費して漸く観音堂、仁王門、本堂、庫裡等を完成し、母、信行院の悲願を果し得て感無量なるものあり。余既に六十五才、埼玉銀行頭取を勤むること八年。多忙の間に之を完成し得たるは全く観音の妙智力と祖霊の御加護と妻子及数多の信者の援助による。

今や日本は神武以来の好景気と称せらる。冀くば観音の冥助により世界人類の安穏ならん事を」。

昭和三十二年三月二十五日、桐江は不空羂索観音像の縁起を胎内にこう書きしるした。不空羂索観音は三眼八臂で合掌の間に宝珠を持っている。不空とは衆生の心願空しからずの意にして、手に持つ羂索は衆生を愛護引接する意味を現わしている。お経「不空羂索神呪心経」から生れたもの。

桐江が観音像を製作するにあたり大きな援助を与えてくれた沢田政広はその頃、十一面観音を彫り終えていた。そして、桐江が頭取をしていた当の埼玉銀行から彼に次のような奉納書が贈られた。

「平沼頭取殿には昭和二十四年埼玉銀行頭取に御就任になり全支店に大黒天像を安置

することを思い立たれ昭和二十五年から二年半に亘り行務御多端の間に自ら刀を執って九十九体を彫刻し順次全店にこれを寄贈されました。

桐江が埼玉銀行頭取時代に銀行から寄贈された十一面観音。沢田政広作。十一面観音を含め四観音が揃った翌年．本堂が完成して初めて，揃って安置された

頭取殿御彫刻の大黒天は各店に於て行員讃仰の的となり且御取引先の間にも崇敬の念と好感を以て迎えられ……（略）加うるに当行の重要なる関係先に対し或は御取引先の懇望に応じて観音像又は大黒天像等を自ら彫刻して寄贈せられたもの今日迄に弐百余体に及び、これが当行行勢の伸張に多大の効果をもたらしましたことは頭取殿の偉大な御功績の一つでありまして感銘に堪えない次第でございます。

かくの如き御功績に対し埼玉銀行として感謝の意を表したく存じておりましたところ、今回白雲山郷鳥居観音御本堂御完成に当り、沢田政広先生作十一面観世音菩薩像一体を御寄進申上げることになりましたので何卒感謝の微意をお汲み取り下され御嘉納下さいますよう御願い申上げます。」

この文面から、桐江が自分の彫刻技術を生かした顧客サービスが好感をもたれていたことがよくわかるとともに、彫刻が公務と鳥居観音の建立の両面で調和していたといえるであろう。「頭取はどちらにおられるのですか」と桐江の姿が見えないので行員がよくさがした。そんなとき必ず小刀を執って別室で彫りものをしている桐江の姿があった。こんなエピソードのあったのはその頃のことだ。桐江は彫刻をしながら行務の新しい想を練っていたのだ。彫刻することによって精神が澄み切る。頭取平沼彌太郎の知恵の袋はここにあ

ったのである。この奉納は不空羂索観音に納経された同じ三十二年の三月のことである。十一面観音は頭上に十の菩薩の相を戴き、常に十方を観照しあらゆる衆生を救うといわれる。聖観音から最も早く分化したのがこの観音ともいう。こうして聖観音など四観音像が整った翌年本堂が完成して、初めて各観音像の安置どころが定まったわけである。

七観音の独創

桐江はこのように鳥居観音に七観音像を安置すべく、ずっと以前から長期間のスケジュールを念頭において彫刻に励んでいたのである。桐江自身の本音としては観音様の像で手の数の少なくてらくなものから彫ってゆこうと考えていたという。それでまず聖観音（臂数二）、十一面観音（同二、ただし沢田政広作）如意輪観音（同二）、不空羂索観音（同八）と進んできたわけである。三十三年に完成した本堂にはこの四体が安置された。

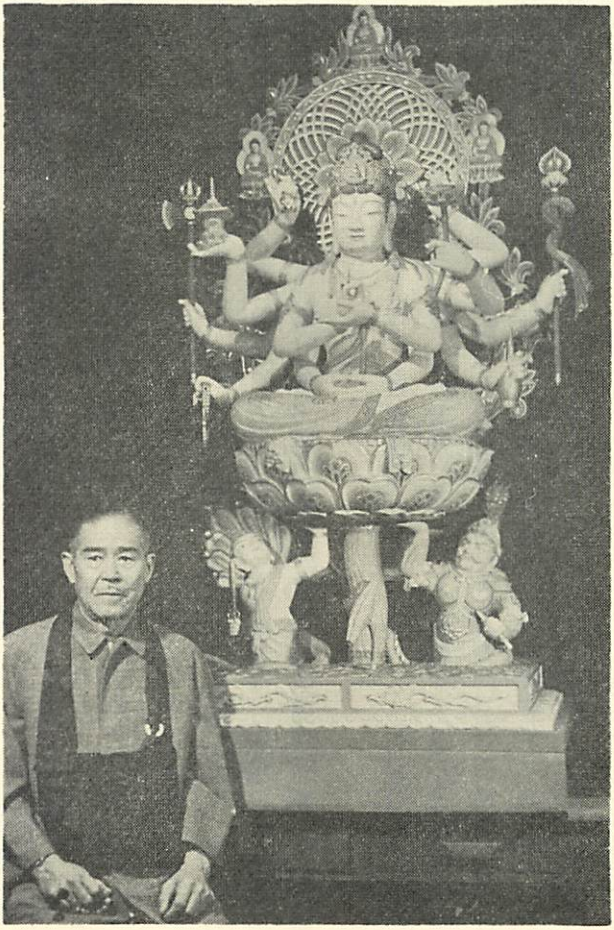
ところで、一般に観音様は六観音が普通で、天台宗では聖観音、千手観音、不空羂索観音、如意輪観音、馬頭観音の六体。一方、真言宗では不空羂索観音を除いて准胝観音を加

えて六観音といっている。桐江は、仏教は元来、一人のお釈迦様から発しているという考え方を貫いているから、宗派による解釈の違いがあるなら、またそれを合しても差し支えないはずという見方にもとずき、七観音を採るのである。

七観音、26年目に揃う

本堂完成後の五月に五番目の馬頭観音ができあがった。丈一・七メートル。頭上に馬頭がのっていて忿怒の形相をした顔が三面になっている。台座が馬頭三個からなっているのは桐江の工夫である。

馬頭観音は――昔、インドのある国の王様と人民が悪竜（敵軍）に苦しめられていたところ、神が王様に駿馬を与えた。この馬が非常な働きをして竜を退治することができた。これがもとで張子の馬頭をかぶって踊る舞楽ができた。これがそのおこりである。忿怒の相をしているのは、この悪竜と斗ったときのありさまを表わしたといわれ、また普通の手段では救うことのできない衆生を威圧により善導するためともいう。そして、馬が秣を食



七観音は次々に完成した。右は本堂完成直後に開眼した馬頭観音。左はその二年後に開眼した准胝観音

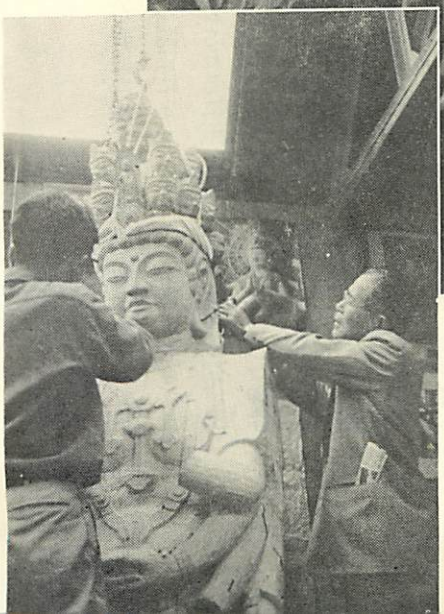
べるのに専念するように衆生の苦しみ悩みを救うのに余念のないこと、奔馬のように早く積極的に邪悪を除くこと、真赤な体の色は太陽を意味し人間の迷暗を照し出し種々の苦難を救う、という三つのご利益をもっているという。この像は有馬老師によって開眼された。

二年後の三十五年五月には准胝観音が総持寺貫主、孤峰智璨弾師導師によって開眼した。丈一・五メートルで馬頭観音とともに小型である。当時、桐江は体調を崩し、また公務が多忙をきわめていたことを反映している。彼がそのときに就いていた要職の主なものは、県銀行協会会長、同信用保証協会会長、同経営者協会会長、経団連常任理事、ほか各種団体役員と多方面にわたっていたのだ。

准胝観音は「仏説七倶胝仏母心大准提陀羅尼経」から出ていて、仏母観音ともいわれる。たくさんの仏の母であり、純粋な母性愛を表わしている。観音様は中性で男女自由に彫られるが、この准胝観音だけは女性である。桐江は母の死顔の美しさを思い出しながらこれを彫った。この作品は台座の竜王の一体を、毒蛇のコブラを光背としてインド式のものになっているのが工夫である。

七観音の最後として最も手のこんだ千手観音に着手したのは桐江五十九才の三十六年である。前年の暮に三蔵塔を完成してほっとしたときだが、実は彼にとって翌三十六年は大

首の部分の据えつけ作業。腕は別に製作されあとで接合させた



千手観音製作中の桐江。七観音のうちで最も困難な作業だった。

変な時となった。世の耳目を集めた武州鉄道事件が表面に出た年である。彼は金融界で重要な地位にあったこと、武州鉄道とは因縁浅からぬ関係にあったことから事件の巻き添えを食い、あらぬ疑いから事件のカギを握る人物と目されるに至った。以来、五年の間、法廷であらそったが、青天白日の身となったのは四十二年であった。このような思わぬ事件がふりかかってきた三十六年、彼は埼玉銀行に迷惑がかかると思って頭取の地位を自らおりた。それで新たな困難が待ち受ける中でも日常にかつてない体の余裕ができた。千手観音はそのような中で彫り始められた。四十年秋に高階瓏仙の手で納経式が行なわれ、結局丸五年が費されて四十二年に完成した。丈三・九メートルという大きなもので、手の数は四二本、最も複雑な工程を経た力作である。重さは三トン。胎内に納めたものが多量だったからだ。縁起が記されたのちに高階瓏仙、塩入亮忠の染筆、沢田政広の絵とともに桐江と一才の曽孫令子の手形がまず納められ、白檀の如来木彫、篤信家七〇余名の名を連ねた板、妻とみの手による写経と家族、信者ほかによる多くの写経、その他、将来解体修理したとき製作年代がわかり、また興味があるような種々の品物が入っている。観音像にこのように品物を納めることは、文字どおり像に真心が込められると同時に大慈大悲の観音のご利益が一層深まり衆生を済度してくれるという悲願によるならわしからだが、それがち

ょうどタイム・カプセルの考え方とも似ていて、その意味ではこうした仏教儀式はタイム・カプセルの先輩格ということができるだろう。

ところで、この像は桐江が特に力を入れてつくったということは金箔彩色で仕上げたことでもわかる。そのため他の六観音と少し調和がとれないようだと作者自身が述懐し、また、この複雑な作品を自分で製作したことによって京都・三十三間堂の千体の千手観音のうち中央の作品が驚くべき名作であるということを改めて教えられた、といっている。それでも彼は縦横に独自の試みを生かした。一般に千手観音の手はカニのように両側に並んでいるものが多いが、彼はそれを花輪の形に配列しているのがその大きな特色である。

千手観音は「千手千眼観自在菩薩廣大円満無礙大悲心陀羅尼呪本一巻」という長い名のお経から生れた。合掌する二つの手を加えた四二本の手、その一つ一つに二十五菩薩の御力があるとされ、二五掛ける四〇で千になる。手の平にはすべて眼が彫ってある。千手千眼観自在を具象している。その意は、無量の方便をもって衆生を救済するという観音の威力のすべてを表わしたもので、聖観音がその力を体内に蔵しているのとは好対照の観音様である。

完成した千手観音。総身体は3.1メートル

本堂増築される

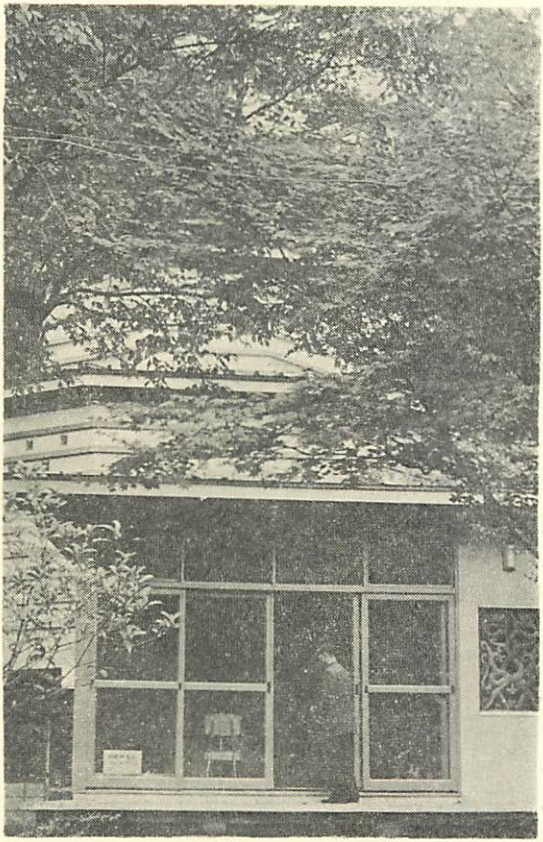
こうして桐江の独創による七観音はここに揃ったわけである。ところで千手観音は大き過ぎて本堂には入らず、さらに三つの観音像は本堂の畳の上に置かれている状態だった。自ら彫った作品ながら桐江はさすがに畏れ多いと思って本堂の増築を行ない、千手観音の開眼式とともに四十二年五月一日と二日の両日にわたり、落慶式が行なわれた。この落慶式は鳥居観音に一つの時代を画すような盛大なものになり、参列した信徒の数は千数百名に達した。このとき鳥居観音講の数三十、講員二千五百名に達していた。

増築されて完成した本堂は五〇坪になり、ここに初めて七観音が一堂に揃って安置されることになった。七観音はいま次のように置かれている。

中央には聖観音と脇侍の梵天、帝釈天が並ぶ。四隅には四天王像が位置し、後列左から准胝観音、如意輪観音、十一面観音、そして馬頭観音、その後ろに不空羂索観音と千手観音が並ぶ。その後ろには桐江の父母の像が置かれた。一般の寺社では本尊は一体が普通だ

本堂は42年5月1日に増築され，それまで畳の上に置かれていた観音像もこれでようやく七観音揃って安置どころが定まった

が、鳥居観音の本尊は聖観音だけのほかに七観音全体を本尊とみることもできる。防災シャッター装置がついた増築された部分が本尊の安置どころになった。天井には五メートルの鳳凰の木彫がなされて



現在、本堂のすぐ隣りに校倉づくりによる文庫があり、鳥居観音の貴重な資料が納められていて、参観ができる。

いて、一般に天井絵が普通なところから、これも一つの試みである。四方の壁面には三〇余体の天女像、正面には蓮華の形をした直径二・五メートルの胎蔵曼陀羅が取りつけられている。七観音の前の須弥壇は大きくなり、燭台、おそなえものが置かれている。両側の童児の伽陵頻迦がこれで一層、親しみやすい雰囲気を生み出し本堂の構成は独特のものになった。この本堂に詣で不空羂索観音に感激した青梅の並木金一郎という人物が一年がかりで描いてもってきた同観音の絵が本堂の右壁に掛けてある

のもみられる。

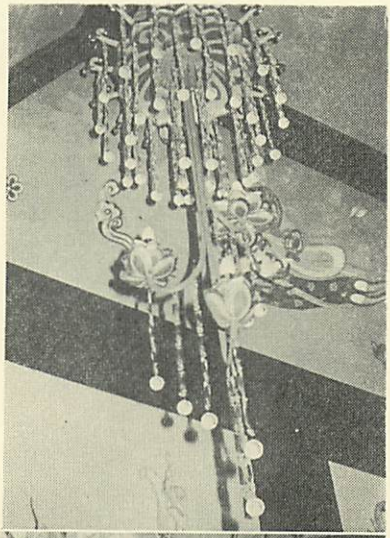
落慶式の日、高階瓏仙は参列した人々に

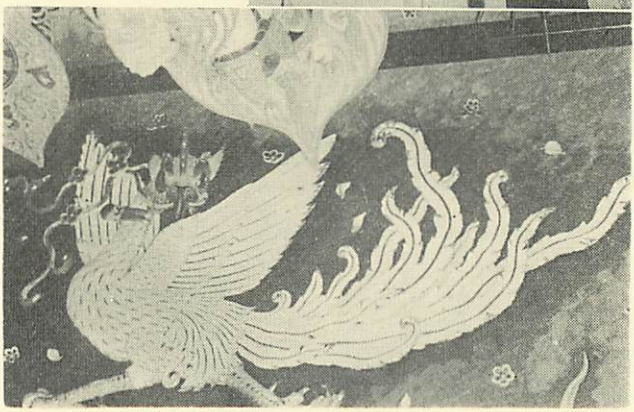
「当山と私は特に因縁が厚く、平沼さんの催しにはたびたび参っておりますが、今日はむずかしい理屈ぬきに観音さまの慈悲について歌できいて下さい」

といって次のような言葉で語った。

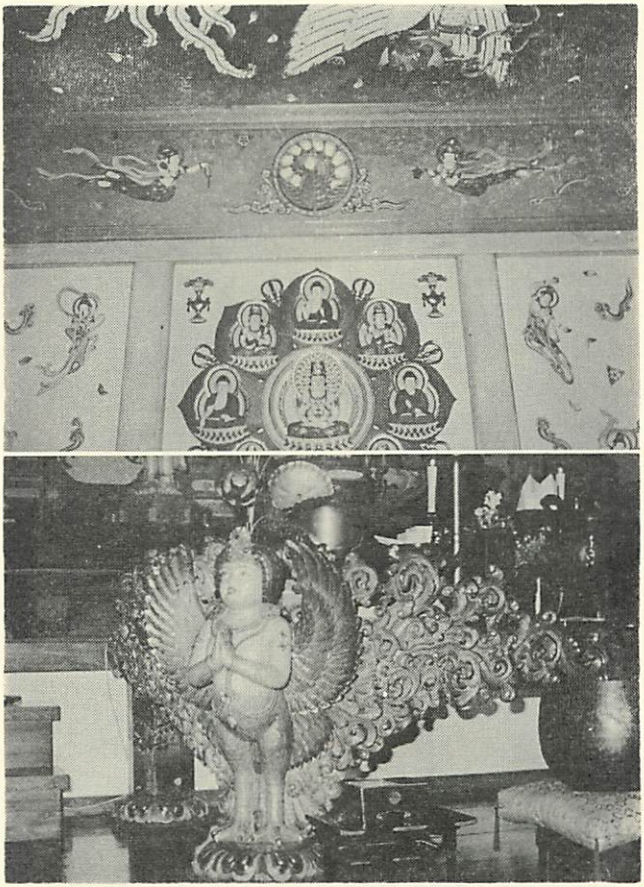
慈悲深き人の心ぞ、福聚海
無量のたから、身にぞあつまる
眼(まなこ)をば開きて仰げみ仏の
隈なく照らす、慈悲の光を
視そなわす仏の慈悲にへだてなし
もるる人こそ、世にぞ捨てらる
衆(もろもろ)の罪はありとも救わんと
深き仏のちからたのめよ
生まるれば死してゆく世の定めなり

我欲貪欲ほどほどにせよ
福徳をねがう心のある人は
慈悲善根を人にほどこせ
聚めては散らすこと知れ世のために
散りてたからの光り輝く
海ほどに深く大きく養えよ
敵も味方もつつむ心を
無理をして得たるたからは浮雲の
やがてなくなることを思えよ
量りなき富にうるおう身とならば
貧しき人に恵み忘るな
心せよ浮くも沈むもわがことを
心をうらむな、世をばのろうな
み仏の教えの道はとにかくに
清き心になれとこそあれ

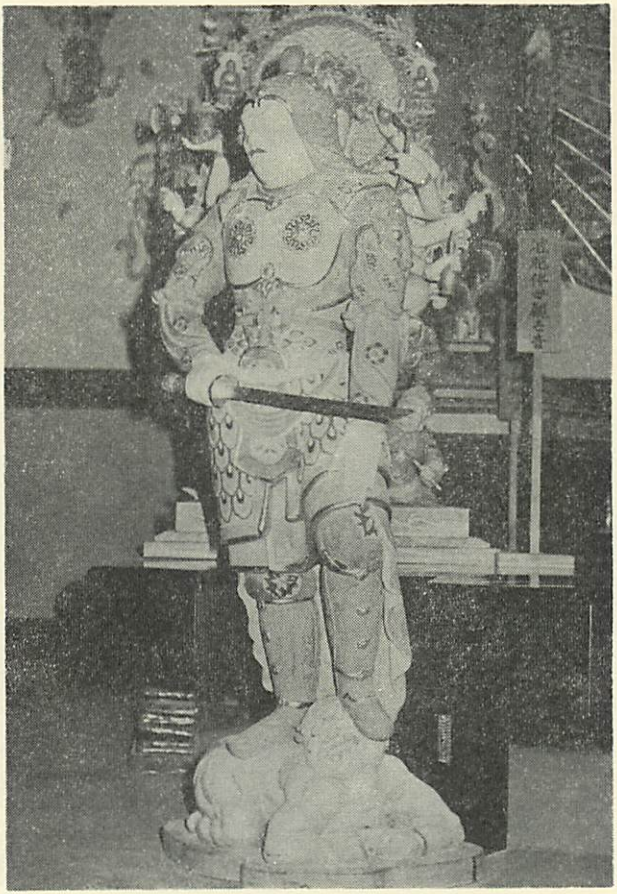




増築された本堂の天井には桐江独自の創作によるシャンデリ四個（右）天井には幅四メートル余の鳳凰の彫刻などが取りつけられた（下）



壁面に二十数体の天女像（上）須弥壇には
親しみ深い陵頻伽迦もみられる（下）



本堂の四隅に沢田政広作の四天王が新たに
安置された。これは持国天（1.7メートル）

玉華門と高階瓏仙

桐江は七観音の最後の作品、千手観音を完成するころから亡き水野梅暁がもう一つ言い遺していったことの実現を考えていた。まことに休む暇もない桐江の発案ぶりだが、ちょうど千手観音に目鼻のついた前後の四十一年末を期して玉華門（支邦門）の建設に着工した。

三十五年には三蔵塔が完成しているが、水野梅暁は三蔵塔ができれば支那門もぜひほしいものだといい、桐江に建立を託していた。三蔵塔は桐江独自の試みがいかんなく発揮された塔になったが、これにふさわしい門をつくろうと桐江が考えたのも自然である。彼はこの年の一月にタイの第八回世界仏教徒大会に参加しその後、カンボジア、台湾などを回った。彼は三十年の第三回大会に副団長として参加したことがあり、今回はリラックスした気分で各地の仏教美術や遺蹟を見て回った。この経験が熟して玉華門建設に動かしたともいえるだろう。

「三蔵塔ができたら支那門も必要だ」との水野梅暁の遺言にもとずいて桐江が建てた玉華門。玉華門は高階禅師の命名による。タイ，台湾の仏跡から得たものも採り入れられた

玉華門建設位置は三蔵塔からちょうど真下一〇〇メートルほどのところで、塔から曲りくねった山道を下りてくると道が一直線になる谷あいのつけ根にあたる地点である。門柱は逆U字形の太い磁石のような形で高さ十一メートル、柱には狛犬のレリーフが施された。これはタイの古都チェンマイのお寺で見た様式を採り入れたものだ。柱の上には二層の唐屋になっており、棟先に竜を配し、下り棟と欄かんには鬼、軒先に鳳凰の彫刻が込められた。門の周囲にはたくさんのもみじ、つつじが植え込まれ、

玉華門と命名した高階瓏仙禅師がカゴで白雲山をのぼる。玉華門の落慶直前に亡くなった。下は禅師の絶筆となったもので同門に掲げられている。

玉華門頂上に一対の竜瓦がみられる

季節になると周囲の色彩に融け込んで玉華門はひときわ異彩を放つように配慮されている。

この玉華門という名はそれまで鳥居観音の主な開眼でたびたび導師をつとめた高階瓏仙が四十二年十二月末に命名したもので、三蔵法師が訳経をしていた唐の寺の名に因んだものである。瓏仙はその名を揮毫して「扁額のできあがるのを早くみたい」と桐江

にいっていたが、病に伏し翌年一月十九日、九十三才で亡くなった。

高階瓏仙は曹洞宗管長としてばかりでなく、仏教界の最高峰といわれていた人で、国内では鳥居の三蔵塔のほか数ヵ所にある三蔵法師霊骨塔の導師として、また大船観音ほか数多くの寺院の指導をしてきた。対外的には仏教に関する会合には必ず出席し、ブラジルなど各国にも赴いている。世界仏教徒大会とインド仏蹟巡拝には二度とも桐江も同道しており、鳥居観音との縁ははなはだ浅からぬものがあった。五月四日、東京港区・大本山永平寺で行なわれた本葬に桐江は壇信徒総代として弔辞を読んだが途中しばしば声をつまらせ先へ進むことができなかった。

門の両側に組み込まれた狛犬

玉華門の落慶式は翌四十四年

四月十七日、瓏仙の侍者、別所竜城によって行なわれた。この日は夜来の降雪が一五センチも積もり名栗は一面の銀世界になっていた。気象台では開設以来の春雪と記録された。

大黒天縁起と銀行

桐江が埼玉銀行頭取に就任して間もなく、所沢の神田支店長がお客さまの財産を預かる銀行の守りの本尊にうってつけの大黒天を彫ってほしいと桐江に頼んだ。これがきっかけになって各支店からの要望もふえて、ついに全店に彫ることになった。このほか取引先や神社などからの懇望があって彫ったのも合わせるとその数は四百数十体になった。銀行と顧客との融合を増してこの大黒天は埼玉銀行に多大な効用をもたらしたのである。これにちなんで各支店で大黒会という会ができた。

ところで、四百余の大黒天が人々に行き渡ったものの、そのご本尊はどこか、ということになって桐江はそれもそうですなというわけで台座とも一・六メートルの開運大黒天を四十三年十月に完成させた。これが奥の院にあるものである。

桐江は頭取時代に各支店や顧客の要望で数多くの大黒天を仕事のあいまに彫った。のちそれらの本尊が必要となって大黒天を謹刻して43年に完成した

大黒天は周知のように七福神の一人で、肩には宝物が入った大きな袋を背負い、右手には自由に金銀財宝を振り出す打ち出の小槌を持ち、福々しい顔で米俵の上に立っているのがよく知られた姿である。この米俵は一人三合として一年分の食糧五斗入り二俵で、〝一生食べるのに困らない〟という意味が込められている。家の中心をなす柱を大黒柱といい、一家の主じをそう譬えたり、またお寺の主婦を大黒というように、大黒様はその家をしっかり守るわけである。そして福禄を与える偉大な力があるので大衆に親しまれ、ことに商業関係者からの信仰が根強い。

大黒天は他の仏と同様、インドに起源している。古いインドの仏典の中にあらわれている摩訶迦羅がすなわち大黒天のことで、大日如来の化身だと説かれている(摩訶とは〝偉大〟(great)の意で、この称は釈尊の十大弟子に授けられた。摩訶迦羅とは英語で Alexander the Great という使い方と同じ)。迦羅はもともと仏法僧の三宝を守護し飲食を豊饒にする神とされ、また外敵を防ぐ戦斗の神でもあり三面六臂の憤怒の相という強い表情をしている。当時は未開で野蛮な時代であり、盗賊など無法者のはびこる不安がたえなかったので、その家を守る神として信仰されたもののようだ。

それが唐に渡るころになると、戦いの神としての性格が持れている。これは社会の秩序

桐江の彫った大黒天の一部。右上は皇太子ご成婚を祝って埼玉銀行が顧客に五万個贈ったものの一つ。右下は30年の作。高さ18センチ。左上は26年京橋支店へ，下は27年本庄支店に贈ったもの高さ。35センチ

桐江は大黒天のほかにいろいろな作品を寄贈したが，これは東京支店ロビーに据えられた伽陵頻迦像。33年作。オルゴール付き時計やスピーカーが内蔵されていて上部が回転する

が確立されていった過程を示すもので、飲食を加護し福徳を授ける神として信仰されるようになった。その頃の書には「寺院の厨房に祀られ、香華、飲食物をお供えすると、たとえその食糧のなくなったときでもその寺院の僧侶のためにたちまち食物を与え給うのである。そのうえ、その家の財宝を外敵から守っておられる」とある。

唐の時代には一面二臂の姿で左手に黄金の入った袋の口を握り、これを左の胸に持ち、片方の手に剣または宝棒を持っているのが普通で、鎧を着て頭には冠を戴き臼の上に左足を組んですわり、右足を下にたらしている、というふうに変わっている。

この中国の大黒天が仏教とともに日本に入ってきた。天台宗の伝教が比叡山を開いたとき、地の神様にその守護を頼んだところ、その神が大黒天に姿をかえて現われ、山内三千衆徒を守って伝教を畏れさせ、伝教は自分で大黒天を彫って祀った。これがわが国初の大黒天信仰であるといわれる。

しかし、この大黒天信仰も中国から伝わったままでは広まらず、いろいろ日本人に合った形に変わっていく。九州・太宰府観音寺の大黒天は左肩に空の袋がたれさがり、右手には小槌を持たず腰のところで手を握りしめていて、顔つきはきびしく米俵にものっていない。盤若寺の大黒天は三面六臂で、三つの顔はいずれも怒りの表情だ。正面二本の手に剣

大蔵省銀行局に大黒天を贈る桐江（上、32年ごろ）下は自宅で大黒天を彫刻している桐江（28年）

を持ち、右手には人間の頭髪を握り、左手は羊の角をつかみ上げている荒々しい表情。このようにいろいろな形に分化したあとがうかがわれるが、鎌倉末期に現在伝わる形に固まった。それは出雲神話に伝えられる大国主命が〝だいこく〟という同じ音であることがきっかけという。大国主命は医術、農業、縁結びの神として信仰されているが、この信仰と

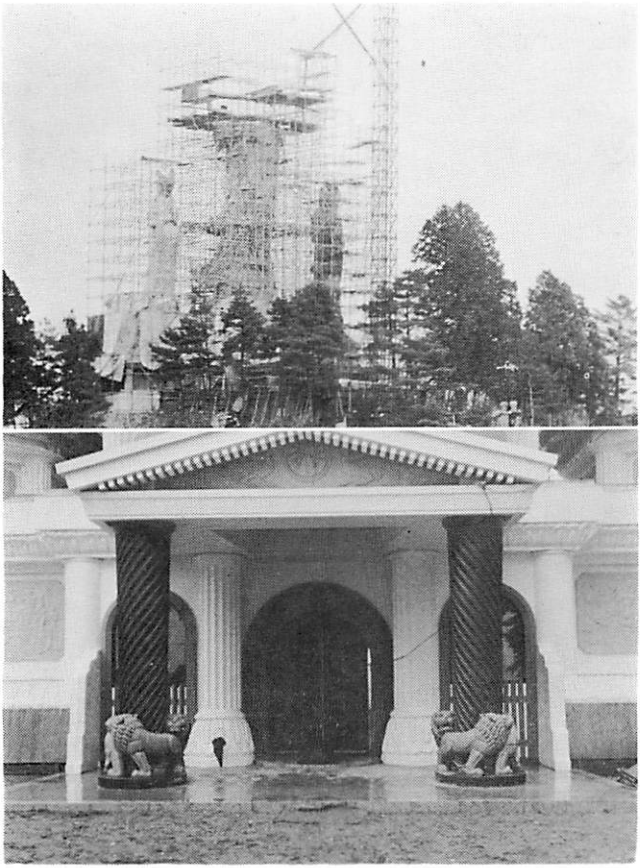
大黒天とが交じり合って、つまり神仏合体して今日の福々しい大黒天に変わったのである。徳川時代に七福神の一人として欠かせぬ神となった。

大黒天がねずみを従えているのは、神話で大国主命が広野で火に囲まれたとき、ねずみの大群が現われて周囲の草を食べ尽して命を救ったという話から出たものと、五穀の神である大黒天がその五穀を食べるねずみを調伏して家来にしたという二つの話が加わったものらしい。

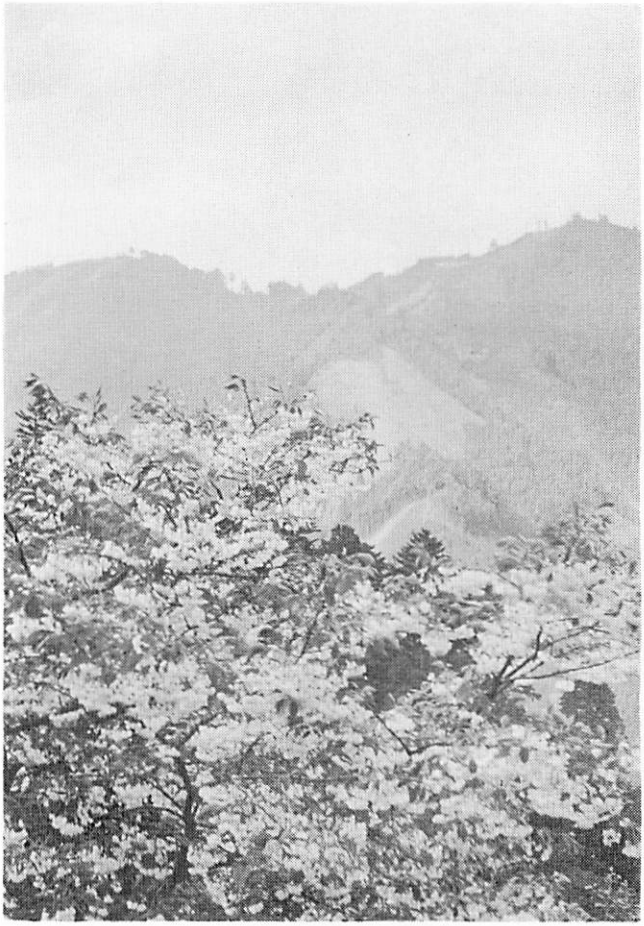
いずれにしても、この大黒様は、傾いていた埼玉銀行の建て直しに役立ったもので、桐神の守護神として、いわれと全く同じような効用を果たしたことは妙というべきだろう。

救世大観音の原型。これを六倍に拡大して本像がつくり上げた

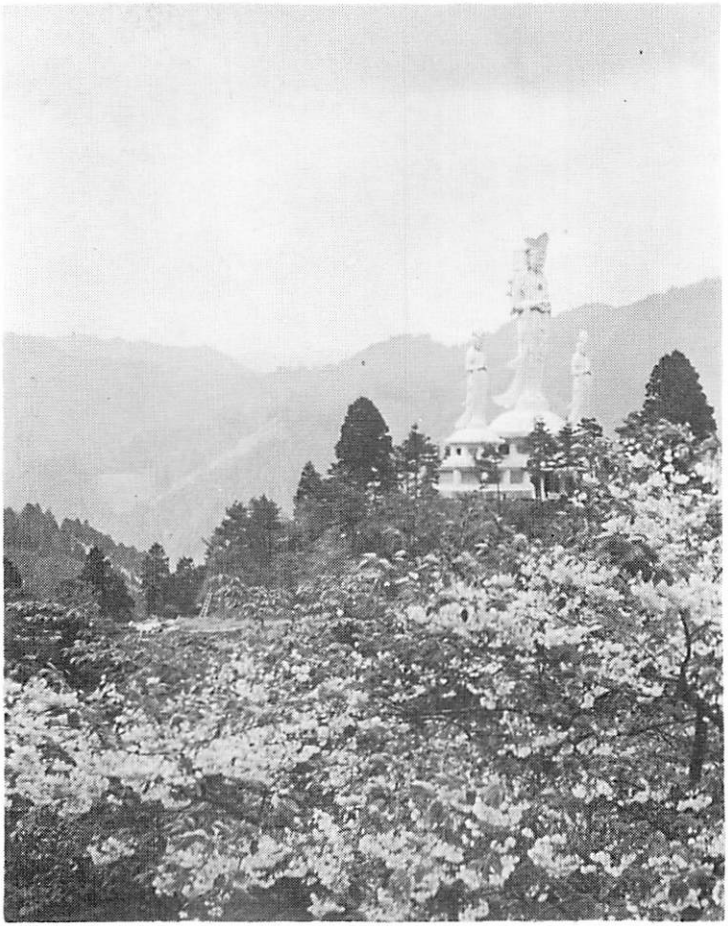
原型を六倍にした大観音左の脇立ち・梵天の頭部。この大規模な作業は彫刻界に話題をまいた



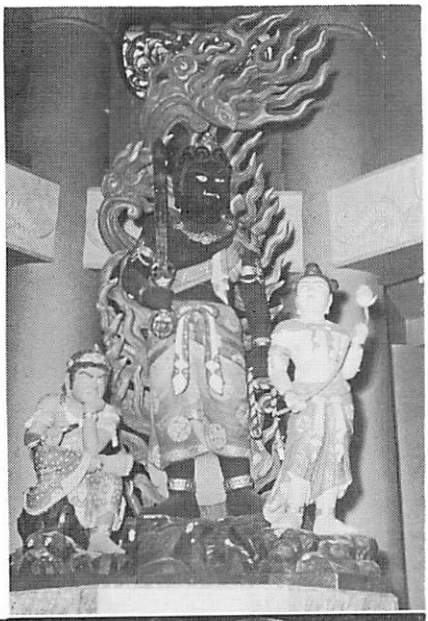
頭部，胴，脚部と分けて製作された像は基壇に積み重ねられた。技術の粋を集め，強風や地震にも十分耐えられる。45年に足場が取り除かれてから内部の整備が進んだ（上）。下は正面入口。ギリシャ様式をとり入れた柱など創意がくみとれる

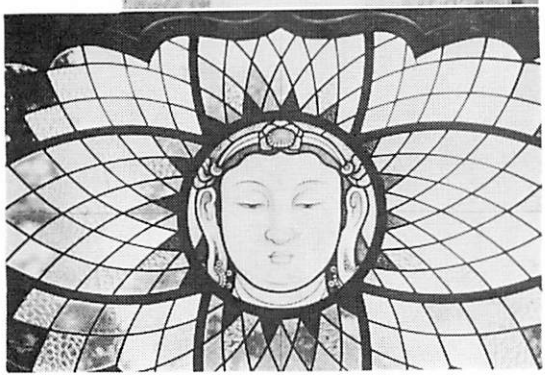


四六年の春。足場が取り払われ、木々の色彩と名栗の谷を背景にクッキリ姿を現わした救世大観音像。基壇とも総高三三メートル。観音像として日本で三番目に高いが、結集された技術を施された美術の豊かさでは随一のものであろう

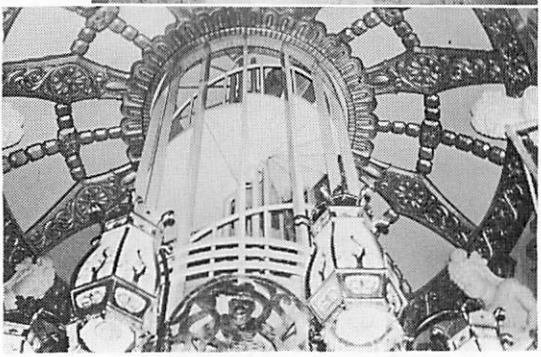


大観音内の中央ドーム。数多くの彫刻が壁面に納められている
（45年７月）

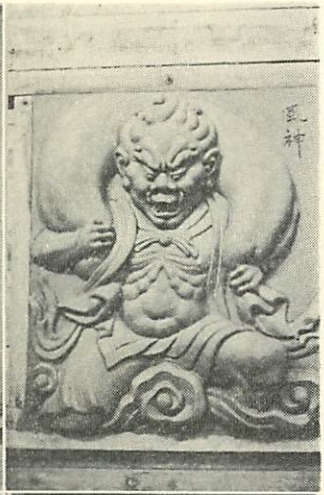


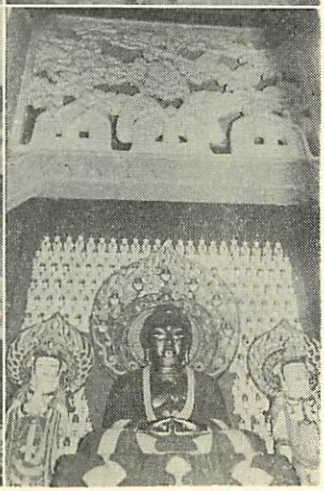


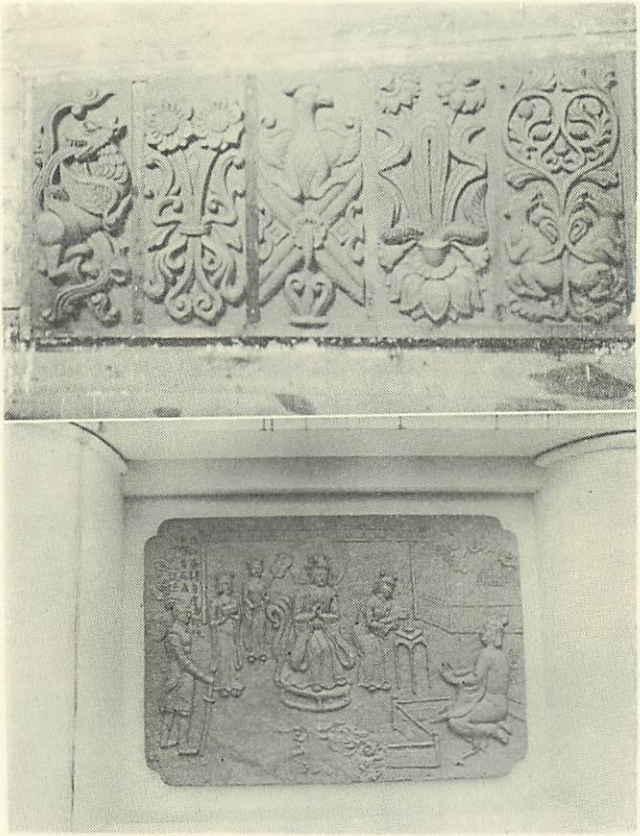
大観音堂宇内に施された彫刻、美術。右は不動明王、下は色あざやかなステンドグラス。桐江は中近東を巡拝して感銘した美術様式を現代風にアレンジして採用しているところが見どころ



右は吉祥天。色彩があざやかだ。四四年八月に納経式をおえて大観音堂宇内に安置された。下は天井大法輪の中心につるされた独特のデザインによるガス灯。左ページ上二つは壁面の二八部衆から二つ。下右は堂内正面に安置された阿弥陀如来像。その上の沙羅双樹、菩提樹、無憂華の三つの華の彫刻も個性的。左は十二神将製作中の桐江（四六年四月）


風神





28部衆の間のしきりにある壁画。多様な草花や鳥獣がにぎやかだ。下は堂宇の外壁にみられる16枚の壁画の一つで観音妙智力を表現したもの（沢田政広作）

下がアトリエで完成した四天王のうち増長天。上が大観音に配された姿。これはヨーロッパの建造物に見る置き物に発想している。

大観音上棟式場に赴く岩本導師（曹洞宗管長）。右は先導する桐江

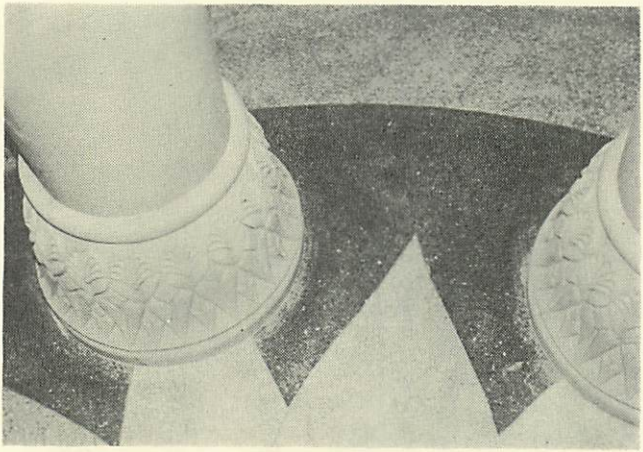
第六章　救世大観音建立と永遠の追求

宗教美術の超時代性求めて

平沼彌太郎は外遊体験のうち、仏教関係の催しで海外へ渡ったことが五回ある。昭和二十九年の第三回世界仏教徒大会でビルマ、インドへ。四十一年の同八回大会でタイ、インドへ、四十一年はカンボジア、タイ、台湾巡拝、四十二年の地中海沿岸、中近東、四十三年十月西アジア、セイロン旅行などである。また二十六年にはアメリカ寺院も見ている。

彼はこれらの旅行で東西両洋の宗教建築、美術様式を足の届く限り見て回った。彼の目は宗教のオリジンを探る目であり、宗教美術の永遠性とは何かを追い求める目であった。彼の仏教彫刻に対する考え方はそれらの体験からしだいにある確信へと導かれ、普遍的なもの、時代を超越するものとは何か、彼は求める道をずんずん推し進めて行った。

彼は形にとらわれない。ただ古いだけのものには興を示さない。これまでの仏教美術のほ



中央広場の柱はペルシャ宮殿の逆さ柱の様式を採り入れたもの

とんどがお経に縁起しているが、それにもとらわれない。だから批判も彼の耳に届く。だが、彼はいま固い信念を形づくった。まず日本の仏教、その美術は中国から渡って来たこと。中国での仏教は三蔵法師がわざわざ天竺まで留学したようにインドに起源する。さらに一方、文明の発祥地のメソポタミア地方に偉大な宗教が起こっている。これらの宗教の相互影響——日本の宗教美術様式のオリジンはみなあちらにあるものばかりである。彼は東西両洋で支配的な三つの宗教の聖地でそれを確め、普遍性を求めるには両洋のよい点の折衷であり、調和であると考えるようになった。ただ、たしかにマ

42年、桐江が中近東を回ったときのスナップ。クレタ島のクノックス宮殿・逆さ柱で。

ネて十分に調和しない場合もある。現代性を取り入れると味が落ちることもある。しかし、単に旧来の形式の踏襲では意味がない。彼はそれに満足できない。有名彫刻家においてさえも自家それぞれに形式をつくり上げてしまっていて、時代を乗り超える志向がみられない。

桐江は二千年も四千年も前のものがいま観賞に耐えていることの秘密を探ろうとしているのだ。それをいま彼が自己の作品に試みているのである。彼のその試みが何十年、何百年のち観賞に耐えうるものとなることを信じながら設計しノミをおろすことがないのである。

時を乗り超えること――彼の悲願はこの一点にあるといえるかもしれない。もう彼の耳

には批判の声は聞こえない。

芸術観と宗教観の結集

「昭和四十三年七月七日、晴。白雲山の広場から北方約一〇〇メートルのぞんだところに面白岩と名づけられる地点がある。すでに地ならし工事がされて、海抜四八〇メートルのこの広場に三尊仏が建設されるため、本日地鎮祭が催さる。午前十時、枝久保宮司によって執行。青葉輝く全山、白いテント、張りめぐらされた紅白の式幕に式場いよいよ整然とす。本日の参列者、開祖平沼桐江夫妻、代表役員平沼宏之、今津・服部の両氏、ほか関係者二〇名。かくしておごそかに終了。」

救世大観音建設地鎮祭の模様を『鳥居観音のしおり10号』が四十三年の催しをこう記録している。

大観音建立の悲願はいつごろから桐江の心に芽ばえたろうか。彼はすでは鳥居観音に一時期を画す七観音を四十二年に完成したが、次々に湧き出す知恵はこの時に大観音建立と

いう目標にしかと定まったようだ。それは五回にわたる聖地巡拝で素地が固まっていたものであろう。

「高い山頂である霊地から、あまねく世間を見そなわし、偉大なる大慈大悲の威神力により衆生を済度し、この不安な世相を是正して平和な国土、万民豊楽をこい願う一途の念から」発願したという、桐江の大観音建立についてのいきさつを、彼の言葉でもう少し記録しておく。

「人間には高いものとか偉大なものに、威圧と畏れと、そして憧れをもつ本能のようなものがある。私は数年前、中近東の古蹟を巡拝して回ったが、その雄大さ、豪華さに全く心を奪われた。その一例が、アフガニスタン北辺の大雪山山脈にかこまれた三千メートル近い高原に、有名なバーミヤンの石窟群の遺跡があり、高さ五三メートルの大石仏は回教徒に破壊された跡はあるが、その彫刻の堂々たるさまに威圧され、思わず合掌したものだ。その大仏の頭上にのぼってみると万年雪と氷河におおわれた大雪山やヒンズークシ山脈などの雄大な景観は筆舌に尽しがたく、ヒンズー教が神の霊地として恐れ信仰していることのいわれがよく理解できた。

「ビルマ人は収入のほとんどをパコダ（塔）にはりつける金箔を買って奉納することを

一生の願望としている。死が近づくと遙かに聳え金色に輝くパコダを礼拝しながら息を引きとることを無上の幸いと固く信じている。ビルマ人ならずとも、あの崇高なパコダには心を引きつけられる。

「私はこの旅行によって受けたいろいろな刺激から、余生を大観音建立に捧げたいとの悲願をたてたが、もう一つの理由は、日本は敗戦のために思想は混乱し人々は物質文明のとりことなり、祖先が築きあげたよい伝統と信仰心は失われつつある現状をみて、高所より大衆をみそなわす大観音の偉大な妙智力で衆生を済度し、これを幸福に導き、かつ日本の平和を守っていただきたい。そして多くの人々が、自然とこの山頂の救世大観音に引かれて風光明媚な白雲山の景色を探勝しつつ、知らず知らずのうちに信仰心が呼び起こされるのに役立てばありがたいことと思う。」

桐江の気持は以上の言葉の中に尽されているだろう。

観音像に忿怒のおもてをしたものがよくみられる。仁王様もしかり、十二神将や二十八部衆にも見受けられる。これは威圧しながら衆生を善導するという意がある。その意味では忿怒の相ばかりでなく、高さ、大きさがまたそれを表現しうる。山全体を霊地とする大きな、しかも長い期間にわたる構想をもつ桐江は、どうしてもこの救世大観音建立に行き

つかねばならなかったはずである。

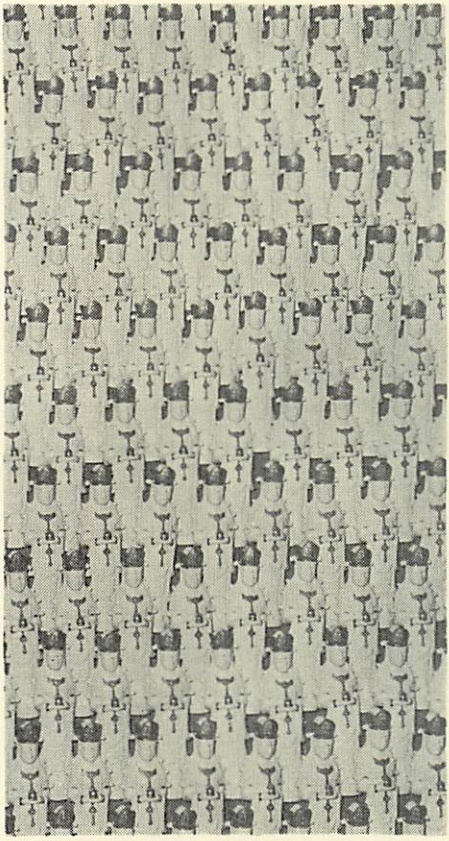
長い宗教体験、人生体験をもとに近代感を取り入れての独創的な構想は四十三年七月に設計図が広げられ、二年後の四十五年五月九日、曹洞宗管長・総持寺貫首岩本勝俊を導師として迎え上棟式を行なった。

話題まいた創作工程

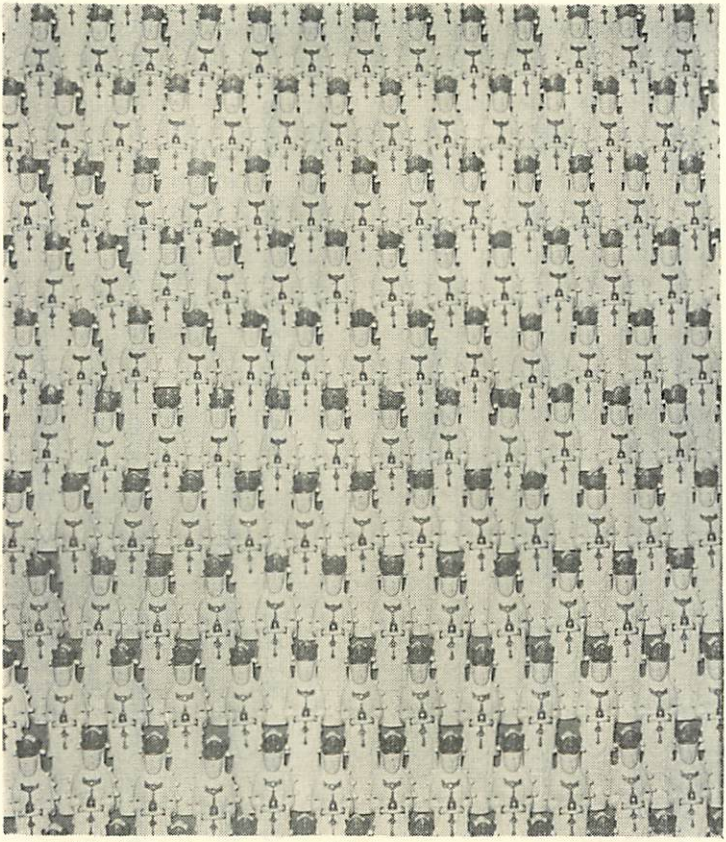
それまでに東京・江古田の桐江のアトリエでは大観音の模型（四メートル）をつくり、それを六倍に引き延ばすため三メートルずつ区切って粘土づけをする作業が進んでいた。こんな巨大なものを粘土で拡大することは日本では初めてのことで、彫刻界でも話題になったのである。この作業には彫刻の権威と美術学校の多数の学生を動員して一年余を要した。一方、面白岩では観音像が載せられる堂宇の基壇が、そこへの道路もまだ十分整備されないうちにも着々と進められた。その基壇は高さ一〇メートル、広さ二〇〇平方メートルになった。四十三年五月の上棟式には中央の救世観音がおびただしいやぐらの中に姿を

みせたのである。

四十五年末、大観音像の足場が取り除かれた。鳥居観音に一キロほど近づくと山あいを通して白い巨大な三観音が天上から鳥居に降りたったかのごとくみえてくる。中央の救世観音は二三メートル。脇立ちの梵天、帝釈天がそれぞれ一二メートルという大きさ。東京湾観音五〇メートル、高崎観音四〇メートルに次ぐものである。



並んでいる。一体一体に奉納者の名が刻ま



大観音胎内の圧巻の一つは一万体観音。高さ33センチの観音像が整然とれ先祖の霊をなぐさめるものである。

両脇立ちについては、一般には鎧を着て巻物と独鈷をもち腕を広げているのが普通だが、この高い場所では支えもなく風圧が強いので桐江は合掌の姿を採り入れた。したがって、この三像をみると三観音とみられなくもないが、合掌の梵天、帝釈天の例もなくはないのであって、別に突飛な構想ではないのだ。

かくして、昭和四十六年十一月十一日の大観音像の落慶式へと作業は一直線に進んでいった。大観音は一年前にその姿を天高く現わしている。それ以来、入魂のための心を尽した仕上げが続けられたのである。

入魂の数々の胎内構想

まず、大観音の胎内と堂宇に高さ三三センチの観音一万体の奉安がその一つである。一万体の永代供養の悲願を込めたものである。一口に一万体といっても、一人の人を供養するとしてその人の生は父母なくして存しなかったわけであり、その人を供養しようとするとき当然、一番近い先祖を加えなければならない。すなわち、一万体を供養するというこ

とは、おのずと父母を加えた三万体の供養を意味するのである。とすると、一人の人の先祖は三代目で七人、四代目で一五人、五代目で三一人となり十代目で千人を超すことになる。それが一万体ある。

ある僧侶はこの一万体供養の構想を聞いて、しみじみとこうもらした。

「寒気がするほど恐わいことだ」と。

中央に大ドームがある。その天井に法輪と梵字、梁にレリーフ、観音眷族二十八部衆、さらに観音三十三応身などが取りつけられている。また吉祥天、不動明王、阿弥陀如来が大観音の魂として安置される。中央の大観音の壁面にそって上がると大観音のちょうど背のところで外に出られ、そこが見晴し台にもなっている。そこから名栗の谷を見おろすとき観音になったかのような境地にひたれるかもしれない。

大観音像の基壇四方には二・五メートルの四天王が配されている。これも桐江の独創だが、ヨーロッパ、ギリシャなどの大きな建築物にはその入口や門、さらに建築本体のあちこちに必ずといっていいほど置き物、例えば騎馬にまたがった武将とか偉人、獣の像が載っている。四天王の外部配置はこれにヒントを得たものだ。

このほか数々の、そして目立たない工夫、独創性が込められた彫刻があちこちにみられ

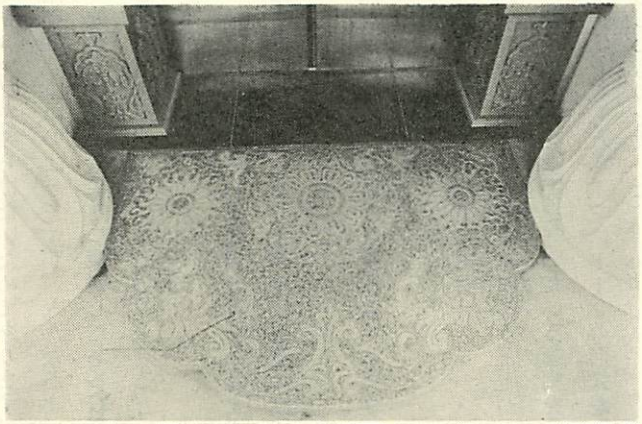
る。彼がギリシャで訪れたある古跡では、ひと回りするのにも大変な直径何メートルもある巨大な柱が何百本も立ち並ぶ建築物があった。その質量に彼は圧倒された。ガイドが「夜ここにいると、王様が何百人もの美女、百官をはべらせ、けんらんたる古代の王宮の再現がみられます」などと、とぼけた説明をしたが、その話もおかしくないほど昔の有様をしのばせると彼は感じた。そういう体験も彼の脳裡にあったことを思いおこさせる。

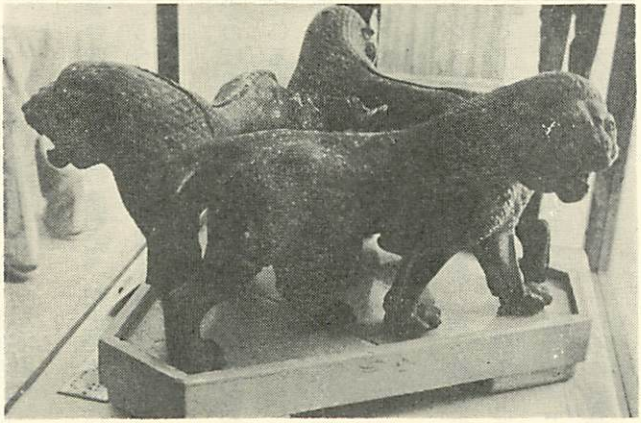
桐江が大観音建立案内として記したもので彼の苦心や工夫などをもう少し紹介しておく。

「救世観音は三信工業の力をかり三年余を費して完成しましたが、来る十一月十一日、曹洞宗管長岩本勝俊猊下にお導師をお願いして開眼、落慶式を挙行するまでとなりました。なにしろ高さ一〇メートルの堂宇の屋上に二三メートルの大観音をお乗せしたのですから、台風、地震に耐え得るように設計するため、今津技師らは非常なご苦心でした。

またこの設計はインド、中近東の建築様式と日本寺院の様式とを融合させるためにいろいろと無理があります。たとえば、玄関を日本式でなくギリシャ式にしましたのは、ステンドグラスを生かすように玄関の屋根を低くしたいためです。

堂宇外壁には沢田政広先生作の観音三十三応身のレリーフを取りつけ、その屋上の四方に二・五メートルの四天王をお乗せしたり、正面玄関の両横に仁王尊を安置したのも、こ





上は堂入口に配されたムーンストーン。セイロンの寺院でよくみられる様式。下はテヘラン博物館の三頭の獅子。これも桐江は参考にしている

のギャップを柔らげたいためであります。この仁王尊は佐野友二様の寄進されたもの、徳川初期のもののようですが、なかなかよい味をもっております。

救世大観音は堂宇内に陳列してある石膏の四メートルの原型を、粘土で六倍に引き延ばしたのですが、ブロックで積み上げるという今までの建築法よりも線がよく出て美しく見えると思います。

堂宇内部中央から大観音の見晴し台までのぼる回り階段も、奥正面の阿弥陀如来を拝むのに邪魔だと思いましたが時代感覚は出ていると思います。

内部両横の大天蓋（二・六メートル）は内面に鏡を張り、イランで買い求めた美しい灯籠を真ん中につるすなど奇抜なものですが、この変わった堂宇には却ってシックリしたように思います。……」

そのほか、中央入口の柱はギリシャ・クレタ島のクノックス宮殿の逆さ柱が取り入れられている。逆さ柱とは一口にいうと上が太く下が細くなっているもの。桐江は根元に三頭の獅子が回って堂宇を守っている彫刻を取りつけた。また入口の踏み石はセイロン島の寺院でよく見られムーンストーンの形式を取り入れたもので、御影の一枚石に唐草模様を薄彫したものを敷いた。

このように救世大観音本体および内部は桐江美術の結集ということができる。そこから桐江の芸術観とそして宗教観が浮き彫りされてくる。

昭和四十六年十一月十一日は鳥居観音に大いなる力がまた一つ生まれる記念すべき日である。竜門社から八十才の寿杖を得た桐江平沼彌太郎は翁と称することになったが、それよりも彼は開祖として救世大観音完成によって永遠の命をさらに確かなものとしたということができよう。

若い世代へのアプローチ

鳥居観音はこうして多くの入魂の儀式が重ねられ霊地としてますます偉大さをますにいたった。と同時に開祖の彌太郎はこれまでの宗教がとかく若い世代に受け入れられなかった障害だった閉塞性を廃し、この霊地を開放的なものにしようという願いが当初からあった。三十二年には庫裡を建設して、参拝者が親しく懇談できるような大広間としたのを初め、遠距離から参詣にくる人々のための宿泊、娯楽場所として観音センターをつくった。

上は40年の本堂増築祝いの稚児行列，下は名栗川での灯籠流し

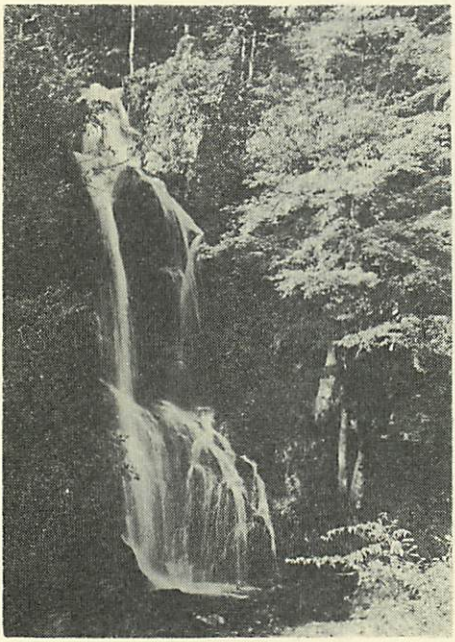
さらに境内ドライブが可能なように道路を完備させたほか観音滝、埴輪型四阿、一本の木で屋根と休憩設備をこしらえた蛇の目傘四阿、見晴し台、白雲橋、梅月橋などの整備を行なった。つまり、こうしてレジャー地としての要素をそなえて、若い人々の憩いの場所とすることに配慮が傾けられたのである。

一本の檜の大木を利用したあずまや。通称蛇の目傘四阿。傘には彩色グラスが施されている

観音滝には行者がやってきて滝に打たれて行く。若い男女が車で山道をかけのぼり、三蔵塔を見る。桐江は「それでよいのです」と眼を細める。しかし、彼は修養道場も近く完成したいと思っている。高校生が本堂で坐禅をくんでいったことがある。道場で修養してからレジャーを楽しませたいと考えているからである。このほか正倉院式を取

り入れた八角の鳥居文庫にはゆかりの水野梅暁の貴重な遺品のほか同観音に深い因縁のある品々、文化財として価値ある彫刻など研究家にとって興味深い資料館もそなわっている。

桐江はいま新たに五万巻のお経を納める納経塔の建立を悲願している。また目下は薬師如来像と日光、月光菩薩、十二神将の彫刻に余念がない。薬師如来は奈良の薬師寺にある金剛薬師三尊や金剛聖観音に感銘を受けたもので、同寺に白鳳、天平時代の名作が残されているが、自分で彫りながらそれらが非常な傑作であることを一層痛感したという。こんどの彼の作品は非常に女性的



観音滝。行者がしばしばこの滝に打たれにきている。滝の右上には観音像が安置されている

美しさが溢れ、その顔は美人の典型ともいえるほどである。このような指摘に桐江は当惑顔だが、解脱し切れないわれわれ衆生が最も入りやすい観音信仰への親しめる手がかりということがいえないだろうか。桐江の作品はそのようにみえる。観音信仰への道もそのようなものではなかろうかと、最後に著者の貧しい主観を述べて筆をおくことにする。

玄奘三蔵法師
靈骨塔建立

発起人名簿

玄奘三蔵法師は、仏法を求めて一七年にわたり難路天竺に旅行して仏教を研究し、仏典の基礎を確立した東洋の偉人であり、かつ日本大乗仏教を今日みるような盛んなものにした仏教界の大恩人とされる。また日本に三蔵塔を建立することは、日中親善のためにも大いに役立つことと考え桐江は現代の日本の有名人を発起人とすることを発願したわけだが、彼は腰に矢立てをさして数年にわたり著名な人々を訪れ自筆署名してもらったのがこの発起人名簿である。鳥居観音の宝物として貴重な資料となっているので以下紹介しておく。

元総理大臣　吉田茂

前総理大臣　石橋湛山

総理大臣　岸信介

前大蔵大臣　池田勇人

前国務大臣　大久保留次郎

前衆議院議長　堤康次郎

曹洞宗管長　宮崎奏道

総持寺貫主　渡邊玄宗

国覚寺派前管長　[illegible]

国覚寺派管長　朝比奈宗源

元総理大臣　鳩山一郎

日本銀行総裁　山際正道

東京都長官　安井誠一郎

大阪市長　中井光次

埼玉県知事　栗原浩

前衆議院議長　船田享二

衆議院副議長　寺尾豊

国務大臣 自治庁長官　郡祐一

元国務大臣 防衛庁長官　木村篤太郎

厚生大臣　坂本鎌三

元國務大臣
元厚生大臣
林譲治

参議院議員
黒川武雄

國務大臣
防衛庁長官
津島雄二

元厚生大臣
中山利生

元埼玉県知事
衆議院議員
大沢雄一

元大蔵大臣
衆議院議員
青木一男

前参議院副議長
明電社々長
大谷貞雄

元衆議院議長
文部大臣
重宗雄三

衆議院議員
橋川雅次

同
山本勝市

同
経済学博士
床次徳二

衆議院議員
藤枝泉介

同
岡田春夫

前衆議院議長
自民党副総裁
大野伴睦

元大蔵大臣
小笠原二郎

國務大臣
西村直己

元國務大臣
衆議院議員
二木謙吾

同
元勞働大臣
衆議院議員
同
同

第一銀行頭取
住友銀行頭取
神田寺主管
全日本佛教會會長
中央商業大學學長
文學博士
元國務大臣

興業銀行頭取
浅草寺貫主大僧正
元大藏大臣
國際商業會議會長
增上寺法主
文學博士
臨濟宗建長寺派管長

東大寺貫主
智恩院門主
清水寺貫主
臨濟宗建仁寺派管長
同　大慈寺派管長

衆議院議員　福永健司

参議院議員　小林英三

山口市長　大野伊豆

県会議長　多賀八郎

衆議院議員　高橋龍太郎

株式会社グリー興業所社長　佐藤栄佐

埼玉化学工業(株)社長　藤岡清作

東洋鉱業化学工業(株)社長　東原光雄

川越市長　伊藤茂吉

県議会議員　深谷清

武州瓦斯株式会社社長　福島次郎

(株)八重洲ロビルディング社長　山崎秀吉

[illegible]

(株)観世音ビジネス常務　田中梅吉

薬紡績株式会社社長　泉井秀吉

所沢市長　鈴木孫三郎

所沢商工会議所会頭　山田力蔵

関東ヤマハ自動車(株)取締役　石坂養平

株式会社原材木店社長　原鶴吉

株式会社八木橋社長　八木橋[illegible]

大映株式會社 社長
永田雅一

海軍製造株式會社 社長
[illegible]

日本火產株式會社 社長
鈴木九平

富士電機製造株式會社 社長
[illegible]

川崎製鐵株式會社 社長
[illegible]

昭和產業株式會社 社長
松本治三

日魯漁業株式會社 社長
平塚常次郎

日產自動車株式會社 社長
[illegible]

富士自動車株式會社 社長
山本勝治

沖電氣工業株式會社 社長
神戸稔二

農林大臣
[illegible]

芸術院會員
宮城生犀星

東大名譽教授
文學博士
宇野哲人

南拓農鑛株式會社 社長
菊地寛實

蛇の目ミシン工業株式會社 社長
[illegible]

琦玉紡績株式會社 社長
[illegible]

朝日土地興業株式會社 社長
[illegible]

平仙レース株式會社 社長
平岡仙之助

株式會社三製作所 社長
[illegible]

株式會社新潟鐵工所 社長
[illegible]

日本冶金工業株式會社社長　森　曉

日東紡績株式會社會長　[illegible]

日本製粉株式會社社長　赤木栄

朝日物産株式會社社長　[illegible]

庁倉肥料株式會社社長　[illegible]

特殊製鋼株式會社　社長　石原素太郎

山之内製藥株式會社社長　山内俊二

味の素株式會社　社長　[illegible]

三樂酒造株式會社社長　[illegible]

株式會社　鐵興社　社長

日本カーボン株式會社社長　[illegible]

日本服毒株式會社社長　高橋[illegible]

森永製菓株式會社社長　森永[illegible]

森永乳業株式會社社長　大串[illegible]

三菱鋼業株式會社社長　伊藤保次郎

東北砂鐵鋼業株式會社社長　[illegible]

東化工株式會社　社長　富田[illegible]

富士精密工業株式會社社長　[illegible]

大和自動車交通株式會社社長　[illegible]

松竹株式會社　社長　城戸四郎

呉羽化学工業株式會社社長　荒木三[illegible]

石川島重工業株式會社 社長 土光敏夫

トヨタ自動車販売株式會社 社長 神谷正太郎

中部電力株式會社 社長 芳川 良

日野ディーゼル工業株式會社 社長 大久保四三

株式會社小松製作所 社長 河合良成

山一證券株式會社 社長 大神一

富士製鐵株式會社 社長 永野重雄

野村證券株式會社 社長 瀬川美能留

大和證券株式會社 社長 田村駒治

日興證券株式會社 社長 吉野岳三

八欧電機株式會社 社長 八尾敬次郎

ブリヂストンタイヤ株式會社 社長 石橋正二郎

大協石油株式會社 社長 高橋真男

山一證券株式會社 會長 小池厚之助

興國人絹パルプ株式會社 社長 金井重雄

山陽パルプ株式會社 社長 難波理一

八幡製鐵株式會社 社長 小島新一

帝國石油株式會社 社長 柳井恒

藤倉電線株式會社 社長 石橋正夫

三菱鋼材株式會社 社長 伊東直彦

株式會社 大水 社長
木村實一

浪花毛織株式會社 社長
亀山泰助

株式會社藤永田造船所 社長
梅村茂

大阪製鉄株式會社 社長
[illegible]

大阪窯業株式會社 社長
高橋[illegible]

積水化學工業株式會社 社長
上野次郎男

三光汽船株式會社 會長
[illegible]

関西電力株式會社 社長
桑田垣士郎

中川電機株式會社 社長
[illegible]

八馬汽船株式會社 會長
八馬兼治

多聞酒造株式會社 社長
八馬兼治

丸紅飯田株式會社 社長
市川忍

同和火災海上保險株式會社 社長
岡崎真一

株式會社淀川製鋼所 社長
浜田正信

住友機械工業株式會社 社長
木村春吉

中華民國総統府秘書長
孫[illegible]

同 駐日大使
[illegible]

同 駐日公使
張伯謹

経濟企画庁長官
河野一郎

大日本インキ製造株式會社 社長
川村[illegible]

大阪商工會議所會頭　杉道助

江商株式會社　會長　駒村俊一

久保田鐵工株式會社　社長　小田原大造

伊藤忠商事株式會社　社長　小菅宇一郎

丸善石油株式會社　社長　和田定二

住友化學工業株式會社　社長　土井正治

日綿實業株式會社　社長　岡島美行

大阪瓦斯株式會社　社長　井口竹次郎

株式會社大阪造船所　社長　南俊二

吳羽紡績株式會社　社長　植場勝三

鐘淵化學工業株式會社　社長　中野良吉

松下電器產業株式會社　社長　松下幸之助

日本レイヨン株式會社　社長　坂口一隆

武田藥品工業株式會社　社長　武田長兵衛

塩野義製藥株式會社　社長　塩野義三郎

大阪砂糖取引所　相談役　不田居吉

大阪製糖株式會社　社長　鈴木茂治

大阪金屬工業株式會社　社長　山田昇

日立造船株式會社　社長　松尾與三松

株式會社栗本鐵工所　社長　笠井田貫一

深谷市長　安部彦平

㈱木村一郎商店社長　木村一郎

橋詰製作株式会社社長　花岡義茂

深谷商工会議所会頭　矢野寛治

樂屋足袋株式会社社長　小池庸三

有限会社栗原代八商店
代表取締役　栗原代八

前羽生市長　出井兵吉

羽生ゴム株式会社
専務取締役　柘植一

東亜酒造株式会社社長　肥土行雄

太陽色糸紡績㈱社長　海老原八郎

朝霞信金事業協同組合
理事長　猪谷義勇

埼玉銀行副頭取　杜文明

同　専務取締役　[illegible]

同　常務取締役　[illegible]

同　常務取締役　前田安彦

埼玉銀行常務取締役　[illegible]

同　常務取締役　[illegible]

同　取締役本店営業部長　小河原勝次

同　取締役大阪支店長　[illegible]

同　取締役人事部長　[illegible]

鈴木商店株式會社 社長

大昭株式會社 取締役

エーゲイ株式會社 社長

株式會社鈴木日本堂社長

國立近代美術館長

東京國立博物館長

自由民主党 幹事長

大多摩鉄道株式會社 代表取締役
東京都麻布区霞町
埼玉銀行 監査役

株式會社東海銀行 頭取

株式會社松坂屋社長

名古屋商工會議所會頭

日本陶器株式會社 社長

中部電力株式會社 社長

株式會社大阪鐵工所會長

日本碍子株式會社 社長

東洋倉庫株式會社 社長

名古屋鐵道株式會社會長

興銀産業株式會社會長

岡谷鋼機株式會社 社長

トヨタ自動車工業株式會社社長

佐々部晩穂

井上五郎

三輪常吉

岡谷四男

石田退三

田辺株式會社社長　四辺茂左衛

青梅市長　梅戸末吉

東京都酒造組合會長　石川弥八郎

八王子市長　蛭口義雄

山岸屋商店　佐辺高助

日本ペンクラブ監事　老川慶喜

デーゼル機器株式会社社長　秋山義愛

飯能商工会議所会頭
飯能繊維工業(株)社長　平岡良蔵

飯能市長　町田右之亮

狭山市長　石川武雄

秋田木材株式會社社長　齊田富三

東邦レーヨン株式會社社長　二木市市

元浦和市長
埼友會會長　小谷野傳蔵

日本製紙株式會社社長　下世古三雄

ライフテ工業株式會社社長　笹沼源之助

浦和市長　川久保義典

松本産業株式會社會長　松本鉄治郎

大宮市長　清水虎尾

小口油肥株式會社社長　宮澤政吉

日本交通株式會社社長
大宮商工会議所会頭　川鍋秋義

故光院門主

秩父セメント株式会社長

日本商工会議所会頭
ソデナ東京株式会社長

前商工会議所会頭
外務大臣

山陽パルプ株式会社
日本フエルト株式会社

経済団体連合会会長
東京芝浦電気株式会社長

大蔵大臣

日本貿易会会長
ニッポン放送株式会社長

東京瓦斯株式会社長

株式会社日立製作所社長

小松智光

諸井貫一

[illegible]

[illegible]

大川鐵雄

石坂泰三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東京急行電鉄株式会社長

国際証券株式会社長

日本ゼオン株式会社長

飯野海運株式会社

日本興業銀行株式会社長

北海道炭礦汽船株式会社長

東海鋼業株式会社長

三共株式会社社長

日興證券株式会社長

日本パルプ工業株式会社長

五島慶太

小佐野賢治

井上英熙

[illegible]

[illegible]

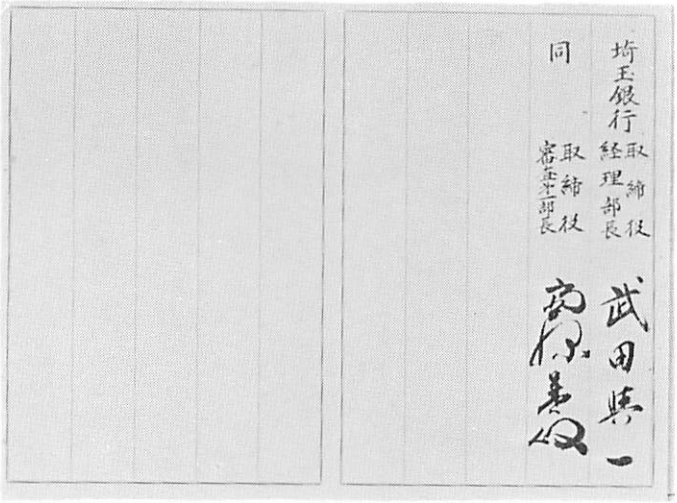
[illegible]

[illegible]

鈴木万平

遠山元一

[illegible]



このほか次の人々も発起人に加わっている。

丸山晴雄〔丸山工業㈱社長〕正田英三郎〔日清製粉㈱社長〕松井琢磨〔理研ヒストリング工業社長〕多賀寛〔浦賀船渠㈱社長〕山田西蔵〔帝国製麻㈱社長〕大泉寛三〔川口商工会議所会頭〕今富祥一郎〔理研合成樹脂㈱社長〕西田嘉兵衛〔西田㈱社長〕山崎貞一〔東京電気化学工業㈱社長〕下中弥三郎〔㈱平凡社社長〕佐久間栄吉〔日新工業㈱社長〕渡辺網雄〔弁護士〕小島正治郎〔西武鉄道㈱社長〕田中実一郎〔田中伸銅㈱社長〕根津嘉一郎〔東武鉄道㈱社長〕小杉義治〔浅野スレート㈱社長〕小野田忠〔㈱金門製作所社長〕藤森賢三〔品川電線㈱社長〕

◎宗教法人鳥居観音・規則

（昭和三十八年二月二日認証）

第一章総則

（名称）

第一条　この寺院は宗教法人法による宗教法人であって「鳥居観音」という。

（事務所の所在地）

第二条　この宗教法人は事務所を埼玉県入間郡名栗村大字上名栗参千百九拾八番地に置く

（目的）

第三条　この法人は聖観音を本尊として観音経の教義をひろめ、儀式行事を行い、信者を教化育成し、その他正法興隆、衆生済度の聖業に精進するための業務及び事業を行うことを目的とする。

（公告の方法）

第四条　この法人の公告は、事務所の掲示場に十日間掲示して行う。

第二章　役員その他の機関

第一節　代表役員及び責任役員

（員数）

第五条　この法人には五人の責任役員を置き、その内、一人を代表役員とする。

2　この法人に顧問を置くことができる。

（資格及び選任）

第六条　代表役員は鳥居観音の主管の職に在るものを以って充てる。但し、主管のない場合は、信者の内から適任者を護持会役員会が選任する。

2　代表役員以外の責任役員は、信者の内から代表役員が任命する。

3　顧問は、代表役員が信者の内から学識経験者、又は寺院に特別の功労あった者のうちから選任する。

（任期）

第七条　代表役員の任期は、この寺院の主管の在任期間とする。

2　主管でない代表役員の任期は四年とする。但し、再任は妨げない。

3　責任役員の任期は四年とする。但し、再任は妨げない。

4　補欠の役員の任期は前任者の残任期間とする。

5　代表役員及び責任役員は辞任又は任期満了後でも後任者が就任する時まで尚、その職務を行うものとする。

（代表役員の職務権限）

第八条　代表役員はこの法人を代表し、その事務を総理する。

（責任役員の職務権限）

第九条　この法人の事務は、責任役員の定数の過半数で決し、その議決権は各々平等とする。

第二節　代務者

（置くべき場合）

第十条　左の各号の一に該当するときは、代務者を置かなければならない。

一、代表役員又は責任役員が死去、辞任、任期満了その他の事由に因って欠けた場合において、すみやかにその後任者を選ぶことが出来ないとき。

二、代表役員又は責任役員が病気、旅行その他の事由に因って三月以上その職務を行う事が出来ないとき。

（資格及び選任）

第十一条　代表役員の代務者は前条第二号に該当するときは、信者の内から代表役員が任命する。

2　代表役員以外の責任役員の代務者は信者の内から代表役員又はその代務者が任命する。

（職務権限）

第十二条　代務者は代表役員又は責任役員に代ってその職務の全部を行う。

（退職）

第十三条　代務者にその置くべき事由がやんだときは、当然その職を退くものとする。

第三節　仮代表役員及び仮責任役員

第十四条　代表役員はこの法人と利益が相反する事項については、代表権を有しない。この場合においては代表役員以外の責任役員が合議して仮代表役員を選定しなければならない。

2　責任役員は、その責任役員と特別の利害関係がある事項については議決権を有しない。この場においては、他の責任役員の員数だけ仮責任役員を選定しなければならない。

第四節　護持会

（組織）

第十五条　この法人に護持会を設け、信徒で組織する。

（職務）

第十六条　護持会はこの寺院の護持興隆を図るものとする。

第三章　財務

（資産の区分）

第十七条　この法人の資産は特別財産、基本財産及び普通財産とする。

2　特別財産は宝物及び什物について設定する

3　基本財産は左の財産について設定する。

一、土地、建物その他の不動産

二、公債、社債その他の有価証券

三、永遠保存の目的で積み立てた財産

四、基本財産として指定された寄附金

4　普通財産は特別財産及び基本財産以外の財産、財産から生ずる果実、並びに一般の収入とする。

（特別財産及び基本財産の設定及び変更）

第十八条　特別財産若しくは基本財産の設定又はその変更をしようとするときは、護持会役員会の同意を得なければならない。

（基本財産の管理）

第十九条　基本財産たる預金は不動産若しくは確実なる有価証券に替え、確実な銀行に預け、その他適切に管理しなければならない。

（財産の処分等）

第二十条　左に掲げる行為をしようとするときは、護持会役員会の同意を得たる後その行

為の少くとも一ヵ月前に信者その他の利害関係人に対し、その行為の要旨を示してその旨を公告しなければならない。但し、第三号から第五号に掲げる行為が一時の期間に係るものであることについて、護持会役員会の承認を受けたときはこの限りでない。

一、不動産又は財産目録に掲げる宝物を処分し、又は担保に供すること。

二、借入（当該会計年度内の収入で償還する一時の借入を除く）又は保証をすること。

三、主要な境内建物の新築、改築、増築、移築、除却、又は著しい模様替えをすること。

四、境内地の著しい模様替えをすること。

五、主要な境内建物の用途若しくは境内地の用途を変更し、又はこれらをこの寺院の主たる目的以外の目的の為に供すること。

（財産目録の作成）

第二十一条　財産目録は毎会計年度終了後三月以内に前年度末現在によって作成しなければならない。

（経費の支弁）

第二十二条　この法人の経費は普通財産をもって支弁する。

（予算の編成）

第二十三条　予算は毎会計年度開始一月前までに編成しなければならない。

（予算の区分）

第二十四条　予算は経常及び臨時の二部に分け、各々これを款、項、目に区分して歳入の性質及び歳出の目的を明示しなければならない。

（予備費の設定及び使用）

第二十五条　予算超過又は予算外支出に充てるため予算中に予備費を設けることができる。

（予算の追加及び更正）

第二十六条　予算作成後にやむを得ない理由が生じたときは既定予算の追加又は更生することができる。

（特別会計の設定）

第二十七条　特別の必要があるときは特別会計を設けることができる。

（決算の作成）

第二十八条　決算は毎会計年度終了後三ヵ月以内に作成しなければならない。

（歳計剰余金及び予算外収入の処置）

第二十九条　歳計に剰余を生じたとき又は予算外に収入のあったときは、これを翌年度の歳入に繰り入れ、又はその一部若しくは全部を基本財産に編入することができる。

（会計年度）

第三十条　この法人の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終るものとする。

第四章

（公益事業以外の事業）

第三十一条　この法人は済世利民の教旨に基づき次の事業を経営する。

一、宝物観覧に関する事業

二、境内道路使用に関する事業。

三、境内地の使用に関する事業。

四、物品の販売に関する事業。

2　前項の事業は庶務部において管理運営する。

3　第一項に掲げる事業から生じた収益は、この法人及びこの法人が援助する法人並びにこの法人が援助する公益事業のために使用しなければならない。

4　第一項に掲げる事業に関する細目は別に定める。

5　第一項の事業に関する会計は一般会計から区分し、特別会計として経理しなければならない。

第五章

（規則の変更、合併及び解散）

第三十二条　この規則を変更しようとするときは、責任役員会の定数の全員の議決を経て、埼玉県知事の認証を受けなければならない。この法人が合併又は解散するときもまた同様とする。

（残余財産の帰属）

第三十三条　この法人が解散したときは、その残余財産は解散のときに於ける責任役員会の議決により帰属する。

附則

1　この規則は埼玉県知事の認証を受けた日から施行する。

〔役員および顧問〕

代表役員　平沼宏之

責任役員　平沼彌太郎　平沼康彦　岡部千三　鷲見保佑

護持役員　佐野友二　小佐野賢治　飯塚孝司　桐木光三　井上竹吉　若林五郎　中里勇吉　宇和野柘植　町田仲太郎

顧　　問　石橋湛山　永田雅一

あとがき

鳥居観音の開祖、平沼彌太郎氏は明治、大正、昭和の三代を生きてこられ、とくに大正、昭和の激動期に家業の林業経営のかたわら、故郷名栗村の政治、経済面はもとより、銀行頭取、参議員、林業各種団体役員とその行動半径は広く社会一般にまたがるものであった。自ら述懐しているように、持ち前の向っ気の強さで、一介の山育ちがどこまでやり抜けるかやってみようという決意が氏のエネルギー源になっていたようだ。しかし、単に決意といっても並み大抵のものではなく、もっと奥底にある氏の行動力の源泉は、長期にわたってインタビューを重ねた私にも今もって十分解明できないでいる。氏はあえてふれようとはしない。それを解き明かしたら、若い世代にとってよいサゼッションになったかもしれない。その点、この本を刊行するにあたり著者の心残りとするところだ。

しかし、氏の鳥居観音と、それに伴なう彫刻活動に打ち込む気力は私の記録で十分伝えられていると思うが、さらにここにあえて特筆しておきたいことは、氏の行動が

非常に遠い未来を展望したものであることだ。たとえば、尊父から託された山林を実証し刻明に実態を把握しようとして大変な時間をかけていること、鳥居観音を霊地にふさわしいものにするために何十年もかけて地味な努力を続けたこと、そして氏の彫刻、ことにその極致である救世大観音の構想と美術様式全体が何十年、何百年のちでも通用するものをとの想定のもとに工夫されたこと――など、常に遙か彼方を見詰めているのである。

氏が「私の彫刻は今日マッチしない面があるかもしれないが、それが将来いつの時代かにピッタリするかもしれない」といっているように、氏の彫刻は独自の展望のもとにある。第六章で記したように日本の古い仏教美術は中国の影響のもとにある。中国のものはインドの美術に影響を受けている。そして世界の宗教美術はおのおのが影響し合っている。――こうした見方が氏の展望に組み込まれている。今マッチしなくとも何百年ののちにはピタリとなる。こうした考え方が氏の特質である。筆者が感銘を受けたところの一つとしてここにあえて再録し、鳥居観音の宗教観として受けとめたいと思うのである。

なお今回、氏の公的な経歴については昭和十八年頃までにとどまり、以後それ以上

の波乱多い生活をたどられたことには十分ふれていないのは本著の不備と思われるが、筆者以上に氏の活躍についてご存知の方が多いと思ったためでもある。そして今回は大観音建立に至る氏の〝悲願〟の経緯に焦点を絞り、それまでの必要不可欠な〝意志〟の記録にのみ集中したためこのようになった。

そのふれない部分の記録にあたっては、この本の何倍もの紙数を費さねばなるまい。そういう機会はまたいつかあるかもしれない。また、氏自らが記録されるかもしれない。氏の多彩な人生とその膨大な行動の成果は容易に表現しがたい。ここにはその主な業績を列記したにとどまったが、氏の大いさの一端をお伝えできていれば筆者の幸いとするところである。

なおこの著書は、氏が「鳥居観音建立の苦心のあとを何かに残したいものだ」と日頃話していたのを、令息の平沼康彦氏（埼玉トヨペット㈱社長）と氏の孫にあたる宏之氏が、ぜひその意に添いたいと私に著作を依頼され刊行に至ったのである。その孝心に感じ入っていることを付け加えたい。

また氏は、インタビューからこの本の校正の段階まで、「鳥居観音が三十余年の春秋を経る間に、いかに多くの有縁の方々の援助が積み重ねられているか」を繰り返し

私に語り、いざ本になろうとするこの瞬間に感無量のおももちであった。私自身も取材の間にそれを十分理解することができた。この書を鳥居観音を護持する人々と共にあることを喜びとするものである。

長期間のインタビューに時間をさいていただいた平沼彌太郎氏と、とみ夫人に記して謝意を表します。

昭和四十六年十月三十一日

編著者

参考資料

「鳥居観音のしおり」（鳥居観音刊）

「西遊記について」（岡部千三）

「観音経講話」（沢木興道著・誠信書房刊）

「法句経講議」（友松円諦著・角川文庫刊）

鳥居観音と平沼彌太郎

編著
島田知明
企画
三上貞夫
発行
株式会社　プレス
東京都中央区蛎殻町2—10
電話（661）9451・（669）5593～4
昭和46年11月5日　第1刷発行

印刷㈱プレス　製版サン商会　製本王冠製本